

賢は黙っているしかなかった。原が住民の情報を書き込んである紙を持って来た。無事だった家の者から町内会長の家を教えてもらい、その家まで行って町民のリストをもらって来たのだった。それからふたりは順次、倒壊している家の中の消息を確認していった。結局倒壊した家から救出できたのは3人だけだった。賢と原は敗北感を感じた。ヘリコプターが畑に降り立ち、救助隊員達が降りて来た。賢と原はその場から次の場所、金谷地区に移動した。

金谷地区の住宅密集地域は倒壊が激しかった。そこでもふたりはOVSと賢の透視、天耳、テレポーテーション、空中浮揚を駆使して、救出活動を続けた。その地域では5名の救出に成功した。それで午前中は終わりにした。ふたりは空腹を覚えた。金谷のスーパーマーケットの前で炊き出しが行われていた。賢と原はすまなそうに握り飯を一つずつもらって食べた。ふたりは直ぐに次の場所、静岡市内に向かった。ここは大変な被害が出ているようだった。しかし、政令指定都市だけのことはあって、救助活動も徹底しているのが分かった。ふたりは空中浮揚で、先ず新静岡駅のロータリーの端に降りた。駅前のビルの内2つが道路側に5度ほど傾いていた。JRは在来線も新幹線も不通になっていたので、駅のロータリーは救援物資の一時置き場になっていた。端の方で炊き出しも行われている。賢は臨時に出来た警察の派出所に行って、状況を聞いた。警察官は住民の対応に追われながらも、救出活動をするのに必要だという賢の言葉を受けて、質問に答えてくれた。

「勿論、家屋の倒壊はおびただしい数に及んでいますが、完全に倒壊したビルは無いようです。半壊や傾いてしまったビルが10棟以上あるとの情報が得られています。今分かっている危険地域はこの5カ所です」
そう言いながら、警察官は地図の上に書き込まれた赤丸の位置を示して見せた。賢はその位置を脳裏に刻み込んだ。警察官もかなり疲れているようだった。ロータリーに戻るとまた余震が起きた。今度はかなり大きな揺れだ。炊き出しの鍋が全部倒れて、みそ汁などが辺り一面に流れ出し、全部台無しになってしまった。救援に駆け付けていた人たちも、ほとんど地面に這いつくばった。幸いやけどを負った者はいないようだ

た。賢と原は警察の示した場所に順次移動して、救援活動を行った。先ず、静岡総合体育館に行った。多くの人たちが一時避難場所として移動して来た後、余震で屋根が崩れ落ち100名以上の人たちが生き埋めになっているとのことだった。最初の地震で屋根を固定してあるビスが何本か折れかかっていたのに気付かずに、町内会の役員が避難場所として、家屋が倒壊してしまった被災者を誘導したようである。ふたりは体育館の前に降りた。大勢の人たちが救助活動をしていたが、体育館は出入りが瓦解していて、鉄の扉を焼き切るしかなく、救助活動は難航していた。賢は早速、内部の状況を透視してみた。天井を支えていた鉄筋も屋根と共に崩落していて、天井の一部が館内の2階の欄干に引っ掛かり、その反対側の床の半面を直撃したようだった。崩落した天井が引っかかっている方の床の上には空間があるようで、中の人たちが押しつぶされた人たちを助け出そうと、必死になっている様子が覗えた。賢は原に向かって言った。

「僕が中の人を順に連れ出して来ます。原さん、助け出した人から、押し潰された人たちの情報を聞き出して、OVSで調べて頂けますか？」

「わかりました。気を付けてくださいね」

賢は直ぐに内部の空間のあるところにテレポーテーションした。賢が突然現れても誰も驚かなかった。血だらけで倒れている者、気を失って横になっている者、下敷きになっている人を救おうと必死になっている人たちが渾然一体となった地獄絵だった。端の方に5人ばかりの女の子達が固まってしくしく泣いていた。賢は先ず全体の状況を把握していると思われる50歳前後の男性をテレポーテーションで外に連れ出した。男性を連れて原の横に現れると、直ぐに男性を原に紹介した。原は中の様子や人々の情報を訪ね、その情報に基づいて順次屋根の下敷きになっている人たちの意識に働き掛けていった。賢は直ぐに中に戻り、子供達を優先して一人一人救出していった。賢が一人連れ出すたびに、人々は次第に取り残されることへの不安を募らせてきた。時々余震がくる。その度に人々は悲鳴を上げた。救出された者達はまだ恐怖のどん底に居て、自分がどのように救出されているのかも理解していないようだった。賢

の行動は既に大勢の人たちがテレビを観て知っていて、原の周りに人垣の輪ができていた。賢は47人目の最後の老人を外に救い出した時、めまいがして原の横に倒れ込んだ。原が駆け寄って来た。周囲で様子を見ていた人たちの中からも何人かが駆け寄って来た。賢に水を飲ませようとする婦人もいた。原が両手で賢の肩を揺すりながら言った。

「賢さん、賢さん、大丈夫ですか？」

賢は意識が無くなっていた。原は暫く賢を揺すったり脈を取ったりしていたが、思い立ったようにOVSで賢の意識に語り掛けてみた。

「賢さん、賢さん、分かりますか？」

暫くの間、応答が無かったが、原は諦めずに続けた。3、4分して、原は賢の意識を捉えた。

「あっ、ああ原さん、僕はどうなっていますか？」

「僕の横に倒れ込んでいます。肉体には意識がありません。でも息はしています」

「原さん、僕の身体の頭頂にある百会の周辺に指を立てて、原さんの意識でエネルギーの注入をしてもらえませんか？それと同時に心で僕を強く呼んでください。僕も自分に戻るように意念を集中させます」

原が言われたとおりにすると、賢は目を開いた。

「原さん、ありがとうございます。エネルギーを使いすぎたようです。少し充電しますから、周りの人に僕から離れてもらって頂けますか？」その言葉を聞いて、心配して近寄って来ていた人達は皆賢から離れた。賢は瞑目して、百会、労宮、湧泉を全開し、そこから自分の身体にプラナーを注入した。その場に居た人達の内何人かには賢の身体のあちこちから空中に向かって光の柱が立っているのが見えた。5分ほどして、賢は両手で自分の顔を擦りながら起きあがった。生存が確認されていた人は全て救出が済んでいたが、まだ半数以上の人たちが落ちた天井の下に居るはずだった。一人の女の子が賢の処に来て縋り付いて言った。

「お母さんと、おばあちゃんが中に居るの。おじさん、助けて」

女の子は友香という名前だった。賢は原を指さして応えた。

「このおじさんに、お母さんと、おばあちゃんのことを教えてあげて、

そうすればお母さん達がどこにいるか見つけられるかも知れないから」友香は原の横にしゃがみ込んで、2人の名前や特徴を話した。原は友香の頭にヘッドギアを付けさせ先ず母親を呼び出した。母親は既に亡くなっていた。OVSの画面に母親とおぼしき女性の顔が映し出された。

「お、お母さん、無事だったの」

「友香、お母さんは今大きな壁の前に居るのよ。ここをどうやって超えるのか考えているの。いろいろな食料や貴重品が沢山あって、重たくて、この壁を越えられないの。そう云えば、どうしてこんな壁があるのかしら？友香には分からないわね」

友香は母が何の話をしているのか、皆目見当も付かなかった。賢は瞑想をして幽界に入った。友香の母親が大きな壁の前で虚空を見つめ話をしていた。友香と通信中だった。賢が母親に向かって言った。

「友香さんのお母さんですね。僕は内観賢と申します。よく聞いてください。貴女は亡くなってしまったのです。この壁は貴女の意識が創り出した壁です。心にある全ての執着を捨て去らないとここは超えられません」

友香の母親は賢の言うことの意味が分かって、自分の死を受け入れ、執着を絶ち切った。それと同時に壁も消え、一人の美しい女性が現れた。友香の母親は叫んだ。

「マリア様、私をお導きくださるのですね・・・」

女性は頷いて母親の手を引いて虚空に消えた。OVSの画面を食い入るように見つめていた友香は、突然母親が消えてしまったので不安に思い原の方を向いた。原は友香に祖母を思うように指示した。友香が祖母にアクセスすると、祖母は現世の意識をもっていることが分かった。落ちて来た天井の下敷きにならずに済んだのだった。先ほどまで救助活動をしていた場所とは、反対側の壁際に出来た狭い空間に居て、落ちて来た天井の直撃を免れていた。賢は直ぐにその空間に移動した。そこには13人の人たちが居て、ほとんどの人が怪我をしていた。幸い祖母に怪我は無かった。賢は祖母を助け出し原の横に戻った。友香が祖母に縋り付いて泣いた。賢は立て続けに12人を救出した。13人全員の救出が完

了すると原が言った。

「まだ生存者が3人、落ちてきた天井の下に居るようです。そのほかの人は助からなかったようです」

賢も自分の意識を全開して確認してみたが、確かにその3名以外に生存者は見当たらなかった。透視してみると、3人は落ちた天井の丁度真ん中辺りに居て、直撃を受けずに助かったようだった。漸く救助隊の人たちが鉄筋を焼き切り、体育館の中に入ることができるようになった。救助隊の2人が「あと3名をどうやって救い出したらよいでしょうか？生存者はどの辺りに居るのでしょうか？」と、賢たちの処に相談に来た。賢は再び透視を試みた。落ちている天井の位置を動かさずに救助できる道筋が読めた。賢にはその狭く、曲がりくねった空間にテレポーテーションする術は無かった。救助隊員達が焼き切った入口の直ぐ脇から、天井の下に潜って入る方法しかなかった。人がやっと一人通れる鉄筋の間を縫う様に進めば、3人の居る空間に出られる。問題は、そこからその人達を導いて来られるかどうかだった。隊員の一人が言った。

「やってみましょう。3人の怪我の程度にもよりますが……」

隊員の中の一人が救助用機材を持って中に這入ることになった。20分ほどして漸く隊員が入り口に戻って来た。その後から2人の男性が姿を顕した。それを見た野次馬達が拍手をした。

「もう一人残っていますが、鉄筋に脚を挟まれていて動けません。先ず、2人を救助しました」

隊員が、隊長と思われる赤い線の入ったヘルメットを被った男性に報告している。

「その方についてももう少し詳しく説明してくれ」

「はい、それは40歳ほどの女性で仰向けに倒れています。両足を鉄筋と床の間に挟まれています。右足は骨折しているようで、暫くの間気を失っていたようですが、今朝方意識が戻ったようです。今、とても苦しんでいます。左足は挟まれてはいますが、ただ動けないだけのようです」

「車のジャッキで隙間を作れないか？」

「瓦解さえ起きなければ多分できると思います」

その話を聞いていた賢が言った。

「僕がやりましょう。ジャッキーを貸してください。人が一人しか通れないところを骨折した女性を背負っては出て来られないでしょう。女性の苦痛を和らげてやりたいので・・・」

隊長が言った。

「いや、これは、我々の様に熟達した者でないと難しい。下手にやると、その女性もあなたも天井の下敷きになって命を落としてしまいますよ」
賢は隊長の言葉に従った。賢は透視で救助の様子を窺っていた。先ほどとは別の隊員がジャッキーやモンキーを持って中に這入って行った。隊員が女性の処に到着した時には女性は再び気を失っていた。隊員は女性の右足横の床にジャッキーをセットし、鉄筋にアクチュエータ部を当てた。ハンドルを付けゆっくり廻していった。鉄筋が10センチほど浮き上がると、女性の脚が自由に動かせるようになった。透視で見る限り、女性の右足の頸骨と腓骨が両方折れているようで、脚が膝下20センチ辺りでくの字に曲がっている。隊員は這い蹲った姿勢で、自分が後ずさりしながら、脇を抱えて女性の身体を引っ張り出した。その時女性に意識が戻ったようである。女性は悲鳴を上げた。その叫び声が外まで聞こえた。救助を待っている隊員達に戦慄が走った。隊員はそこで立ち往生したようだった。あと2メートルほど戻らないと進行方向を変えることのできる空間に戻れない。隊員の立ち往生している場所は鉤形に曲がっていて、完全に身動きが取れなくなってしまった。泣き声の混じった悲鳴が聞こえてくる。賢は意識を集中して別空間を作り、そこに意識を移動した。それから、その女性の居る領域を賢の意識で作った空間に移動させた。女性の脚は折れ曲がったままである。賢は女性の右脚を引っ張り正しい形に戻した。折れている部分がきちんと勘合して形が正常に戻ると、賢は骨の細胞、筋肉の細胞、筋の細胞、循環器の細胞に話し掛けた。「細胞達よ、あなた方が造っていたこの女性の身体機能を、負傷前の状態に還元してください」

賢は瞑想状態で、その女性の肉体にエネルギーを注入した。女性の右足

の骨折部に右手を当て瞑想した。細胞達が一斉に活動を始めたのが分かる。賢は強い意念を送り続けた。15分ほどで女性の右足は元の状態に戻った。骨折部はまだヒビが入っていたが、筋肉と筋がその形を維持するように働きはじめている。賢は別空間を原空間に重畳させた。身動きできなかった隊員は自分だけは何とか方向転換出来る場所まで戻ることができた。そこで、どうしたらよいか途方に暮れていた。賢はその隊員の意識に語りかけた。

「女性の脚は、動かせるようになってきた。あなたが先ず脚から奥に入って、女性にあなたの脚に、掴まるようにさせなさい。それから、女性を誘導して、ゆっくり出て来なさい」

隊員はその言葉に従って行動した。女性は隊員の左足のズボンの裾を掴み、膝下を庇うようにして、這いずって隊員の後に従って出て来た。やがて隊員が入りに姿を顕した。その後から隊員の左足のズボンをしっかり握りしめた女性が姿を顕した。見守っていた全員が歓声をあげ、拍手をした。既に日が沈みかけ、辺りは薄暗くなってきていた。賢と原は札幌の自宅に向けてテレポーテーションした。

家には梓が待ち構えていた。ふたりがリビングに姿を顕すと、梓が拍手をした。

「お疲れ様でした。お食事の用意が出来ています。今日はステーキですよ。疲労が溜まっていると思いましたので、骨付きのリブを用意しました。おふたりともお肉はお好きじゃないでしょうが、今日はエネルギーの補給と思って頂いてくださいね」

「ありがとうございます。今日は特に疲れました」

原は素直に喜んだ。賢が言った。

「梓、ありがとう。君も大変だっただろう。札幌組が退職してしまうんで本社で焦っているんじゃないか？」

「その通りです、あなた。でもみんなあなたに対する処遇に疑問を感じていますから、攻められることはありませんでした。そう、愛子さんは無事に帰りました。それと、もしかすると、愛子さんはロシアへの留学を止めるかも知れませんよ。札幌のバレエスクールの先生が愛子さんの

バレエを気に入ってしまっただけで、是非ここで勉強するようにとおっしゃったようなんです。みんなでここに引っ越して来た方がいいと思いますがいかがかしら？」

「梓、本当か？それは凄いな、もっと詳しく話してくれないか？」

梓はステーキを焼きながら、ふたりに愛子の札幌でのダンススクール訪問について説明した。賢はトウシューズが音を立てずに着地できるのは愛子の空中浮揚の能力の賜だろうと思った。食事を済ますと原が直ぐにPCで被災者の状況を確認した。救助活動が過去にないスピードで展開されていることにメディアが注目し、インターネットにも沢山の書き込みが為されているようだった。過去の大地震の時より早く、ライフラインの復旧に向かい始めていた。しかし、安倍川上流の井川ダム周辺地域、天竜川上流の佐久間町河合地域、大井川支流の寸又川流域、狩野川上流の湯ヶ島、西伊豆の雲見に孤立している地域があり、三保地域と沼津の志下地域が津波の影響で、生活基盤を崩壊されていることが掲載されていた。それぞれ家屋の倒壊などの被害があり、その上道路の決壊で食料と水が底を突いているという説明があった。原はそれを記憶してしまうと、その下に面白い記事を見つけた。世界の貧困層が変化しつつあるというニュースだった。「共同組織への移行・世界の貧困層」というタイトルの記事だった。原はフルマを思い浮かべた。グラニュー銀行の様な、現在の経済の仕組みの中で、そのメリットを生かしながら貧困層を救済してゆくやり方は、他国への利益の持ち出しを拒否するが故に、外国からの援助が難しくなるという説明が述べられ、それに対して、現在検討が進められている方式は、経済の仕組みを根本的に変えてしまうやり方で、それは貧困層という概念を覆し共同体と言う概念に置き換えてしまうものだと言われていた。原はその10ページにも及ぶ解説文を全文読んでしまった。知らないうちに、賢が原の後ろからPCの画面を覗き込んでいる。賢は言った。

「原さん、これですね。個から共同体へ、高みから平野への移行ですね。いずれ起きるには思っていました。高みにしがみつくと存在は、苦しみと、転落を経験することになるでしょうね。高山の頂は眺めがいいかもしれ

ないけど作物は取れませんからね。豊かな収穫は平坦な土地、同じ環境が広い地域に及んでいる平野でないと得られませんね」

「ええ、その通りですね。祐子さんの進めている世界が、我々の未来を開く様な気がします・・・賢さん、一休みしたら救援物資の転送をやりませんか？」

「僕も、今そう思っていたところです。これから、ムクウさんからの指導を受けますので、それが終わってからでいいですか？」

「ええ、勿論です。ゆっくり身体を休めてください。賢さんもこのまま突っ走ると、肉体が参ってしまいますから・・・」

この日のムクウからの通信は「この世界の時空間の変化」についてだった。この世界が根源の世界から写し出された世界であることは賢の認識している概念と一致していたが、ムクウは写された時点での時空間と現在の時空間とが大きくかけ離れていると言った。写し出されたばかりの時は混沌から創造された段階で、この宇宙は時間間隔が無限大、空間領域は無限小に近かったが、現在は、それがものすごい勢いで変化していると言った。それは概念的なものではなく、実際に宇宙全体がそのように高速で動き、空間が拡大しているのだと言った。我々はその真っ只中に居て、変化するスピードに意識が附いていっていないとのことだった。空間の拡大は認識力の拡大を伴っていて、これまで宇宙について見えなかったものが見える様になり、人の認識における隔たりもいろいろな形で狭まってきている。それがすなわち、人間の意識の拡大を意味しているのだと言った。このような動きが起きてくるのは、この世界が常に進歩するように造られているからであり、最終的には、それを突き詰めると、この宇宙そのものが人間の意識そのものの反映であることが見えてくると言った。時間に附いても同様だった。この100年ほどの間に、科学の伸展のスピードが速まり、それが現在ピークに達する段階にきていると言った。人間はこの世界の時空間に完全に同化しているのでそれに気付いていない。何故なら自然界の全ての存在がその時空間の変化に同調していて、種として存在できないものも出てきている。それに対して、自然界は何も変わらないのに人間の思考があたかも飛躍的に進歩し

たような錯覚を起こすのは、人間の創り出すものが自然界の法則から外れているからに他ならないからだと言った。だから、時間が非常に高速で動き、空間が異常に拡大していることが、自然界の生み出す物と人間の作成したものの対比によっても容易に判断できるのだと言った。賢はその教えに敬服した。これまで自然界にあるものを観て時空間が何も変わっていないと観じていた見方が『井の中の蛙』の認識であったことを知った。ムクウはこの世界がもうじき極に到達し、そこから一気に混沌状態に戻る道を進むと言った。賢はムクウの話すことは、様々な神秘家達が述べてきた預言と同じだと思った。急がなくてはならないと思った。先に突き進む正方向の力を強めれば、同時にその対極の力も強まり、バランスを維持しながら人々の意識を目覚めさせようとする為には強い忍耐と意志の力が必要であると思った。

「ムクウさん、今日のお話はよく理解できました。何故急がなければならないか、そして、何故愛と慈悲の心が大切なのが分かってきました。混沌状態に戻るとき、我々の意識の中に残る愛と慈悲の深さが、次に世界が開かれるときに現れてくる世界の構造を決めて行くのだということが分かりました。このように素晴らしい自然を享受させてもらえたのは、これまでの大自然の輪廻の中で、先達たちによって随分深い愛と慈悲が培われてきたためだと理解しました。ありがとうございました。これから、自己を慈悲の権化とし、全体の中に溶解させて生きてゆきます」

「賢、お前は今でも随分全体に融け入っているが、まだ時として知と感覚がお前を個として際立たせ、引き廻すことがある。それを早く鎮めて、自己を完全に放棄し、完全に流れの中に溶け込むようにしなさい。完全なる明け渡しが必要なのだ。その結果、お前自身は大自然そのものになる」

「分かりました。完全に自己の明け渡しができるようになるまで頑張ります」

ムクウとの通信を終えると、賢は亜希子にコンタクトを試みた。亜希子は直ぐに応答した。

「亜希子、体調はどうだ？」

「もう、ほとんど元に戻りました。でも、由宇お姉様がまだ外に出てはいけないとおっしゃるので、アパートの中に籠もっています。お姉様から聞きました。東海地震が発生したそうですね。できることならわたくしも救助のお手伝いに伺いたいと思うのですが、どうしたらいいか分からなくて……」

「亜紀は、アフリカのことだけでも手一杯だろう。こっちは心配しなくても、大勢の人たちが救助活動をしているから……」

「わたくし、もう大丈夫ですわ。亡くなった人の意識が恐怖心から立ち直るのをお手伝いさせて頂きたいのですが……でも、今は由宇お姉様からお許しを頂けないと思います」

「そうだよ。亜紀が完全に回復したら、また頼むよ」

「もう、全く問題ありませんのに……」

亜希子は、病気が回復しても、祐子に過酷な行動を禁じられていることで身を持て余しているようだった。祐子は族長とフルマの代表としての仕事に忙殺されているのに、夜遅くになっても必ず帰宅前に亜希子のアパートに立ち寄ってくれると亜希子は言った。賢は祐子の優しい心遣いに頭の下がる思いがした。賢が部屋を出ると趣味の部屋からごそごそと音がする。賢はそっと覗いてみた。原が物質転送機を操作して、水の転送試験をしていた。半径30センチほどのボウルに水を入れ、それをアクティブエリアのサークルの中心に置いてあり、まさに転送スイッチをONしようとするところだった。

「賢さん、水の転送テストですよ。浴室に送るところです」

「少し待って、送られた水がどんな風に出てくるか、バスルームで見てみるから」

賢はバスルームに行き、扉を開けると、大声で「OK」と言った。バスルームの洗い場の中央付近がぼんやりしてきて、やがてそれがこんもりと盛り上がった形になったと思ったら、一瞬の内に盛り上がるの山が崩れ、サーッと音を立てて水が渦巻きを描きながら流れ落ちた。空間に水が塊のように現れるのは、これまで見たことのない奇妙な印象を与えた。水の流れ出した後、少ししてボウルが裏返しになって現れた。賢は原の

処に行って、見たとおりの説明をした。原が言った。

「賢さん、水が消えるときもそうなんですけど、どうやら空間を移るときに水に渦を作るような力が生まれるようなんです。ですから、ペットボトルなんかに入った水はいいでしょうが、ある領域の水を移すときは十分注意しないと、思いもよらない事態が発生する可能性があるということなんです」

「確かに、渦巻いて流れ落ちたけど、その衝撃を受ける危険性があると・・・？」

「ええ、例えば、湖の水などを火災の消火に使おうとして、直接炎上している家の上に転送したりすると、その水の回転しようとする力で、もろくなっている家屋が倒壊して、2次災害が起きる危険性もあると思います。まあ、一旦別の貯水場に移してから放水するなどすれば大丈夫でしょうが・・・」

「物質の転送も、一つ一つ詳細に確認してから行わないと危険だということですね」

原はPCの画面に出ている孤立化している地域の一覧表を賢に示しながら言った。

「賢さん、どこから行きましょうか？」

「WEBで緊急に物資を必要としていると伝えている所、それから物資供給の目途の立っていない所に優先して送りましょう」

「賢さん、体力は大丈夫ですか？もし大丈夫なら、先ずその土地に行って、どこに送ればいいのかはっきりさせて頂けませんか？」

「ステーキもいただいたし、プラナーの注入も済んだから、大丈夫ですよ」

アクセスするのが最も難しい被災地は大井川支流の寸又峡近辺で、改修した道路が複数の箇所で崩壊していた。更に悪いことに、長島ダムに亀裂が入り、下流の川根地域が鉄砲水の危険に曝されていた。紅葉の季節も終わり観光客の脚も遠のいて、これからいよいよ冬ごもりの支度に入ろうかという段階での地震であり、住民達は倒壊した家屋や施設を前に、生きる気力を失いかけてしていると説明されていた。賢は先ず寸又峡温泉地

域にテレポーテーションしてみることにした。梓が片付けと翌朝の食事の支度を終えて、趣味の部屋に入って来た。

「あなた、私も一緒に連れて行ってください。何かのお役に立ちたいと思いますから」

賢は了解した。梓は直ぐに自分の寝室に戻り、ダウンのハーフコートを着、リュックサックを背負って戻って来た。原が微笑^{ほほえ}みを浮かべて言った。

「梓さん、準備がいいですね」

「あなた方が活動している間、私はいつでも出動できる準備をしておいたのですよ」

賢は梓を抱いて寸又峡の温泉街の駐車場にテレポーテーションした。真っ暗だった。どこがどうなっているのか分からない。やがて目が少し慣れてくると、月が出ているのに気付いた。辺りの模様がうっすらと見え始めた。賢は先ずスマホが使えるかどうか確認した。幸い携帯電話通信インフラは生きていた。梓がリュックサックから懐中電灯と携帯ナビを取り出した。ふたりは懐中電灯を点灯させて温泉街に続く坂道を上って行った。右手に大きな建物が見えてきた。温泉宿の様である。灯りが点いていないので、まるで廃屋のような印象を与える。懐中電灯で照らしてみると、ガラス窓が粉々に砕け、ガラスの破片が周辺に飛散している。誰も居ないようだった。賢が大きな声で呼び掛けた。

「どなたかいらっしゃいませんか？」

何の応答もない。今度は梓が大きな声で呼び掛けてみた。

「ホテルの方、誰かいらっしゃいませんか？」

やはり返事はない。ふたりが諦めて別の建物に移動しようとしたとき、奥の扉が開いて男性が2人出て来た。高齢のように見える。

「わりや、誰だ。ここにや誰もおらんよ」

「皆さんは、自分たちの家にいらっしゃるのですか？」

「家、あるもんは、家に居るけんが、つぶれたもんもおるで、そんひとつちは公民館ずら」

賢は公民館の場所を訪ねた。老人達も公民館に戻るところだと言った。

この旅館には掛け流しの湯が出ているので、入浴に来るのだと言った。

「おみやあら、なんしに来たんだ？」

賢が救援物資を送るために来たと言うと、老人は笑って言った。

「そりゃ、むりだら。どこんともみんな崩れてるら。電気は止まっとるし、こんなとこにへりは来れにゃあら」

老人はそれぞれ一人で住んでいたようだが、この地震で家が傾き、危険なので公民館に移っているとのことだった。ふたりとも地震があったことにそれほどの危機感も抱いていないようで、命があつてめでたいなどと達観したようなことを言った。老人達の話す地震が起きた時の話を聞きながら、後に附いて坂を上ってゆくと、路地を少し入ったところに公民館は建っていた。ドアの隙間から微かに灯りが漏れてくる。ふたりはドアを開けると、賢たちに向かって言った。

「さあ、おまんら、ひゃあれ（入れ）、ひゃあれ、さみい（寒い）からな」

公民館は思ったより広かったが、20人ほどの人々と寝具などでごった返していた。子供も3人居た。棚の上の蠟燭の炎がゆらゆらと揺れている。年老いた方の老人がそこにいる人々に向かって言った。

「みんな喜べ、こんひとつちが救援物資を送ってくれるってよ」

梓が必要な品物を訪ねた。皆てんでに何が足りないか言っていたが、先ほどの老人が意見をとりまとめて言った。

「毛布、トイレの紙、鼻紙、そんなとこかな」

「水は必要ないですか？」

賢が訊いたが、老人は応えた。

「ここは、いい水があるで。おまんらも飲んでけよ」

老人はそう言いながら立ち上がると、奥に行き水を入れたコップを持って来た。賢と梓はその水を口に含んだ。冷たさが頭の芯まで届いた。冷たい水も暫く口に含んでいると次第に甘みを感じてきた。

「美味しいですね。ありがとうございます・・・ところで、食料は足りていますか？」

「明日ぐりゃあまで有るら」

老人はあまり気にしていないようだったが、横にいた主婦が言った。

「是非おねがいします。今でも少し控えめに食べています」

賢は了解した。いつの間にか自分達に対する「支援物資を送ることなどできるはずはない」という考えが消えてしまっていることを賢は面白いと思った。ふたりは了解して公民館を出た。外に出て公民館の裏手に廻った。外には人影は全く無い。梓がスマホで原に救援物資の必要量を連絡した。賢は舗装された広い空き地に行き位置情報送信機をONした。少ししてビニール袋に入った毛布が10枚、トイレットペーパー100個、ティッシュペーパー50箱、インスタント・ライスパック50袋、菓子パン50個が次々に転送されて来た。賢と梓はそれらを5回に分けて公民館に運んだ。公民館の中に居た人たちは驚嘆した。しかし、毛布は待ち望んでいたようで、老人が先ずふたりの高齢者に2枚を渡し、残りは皆で分け合って使うように言った。菓子パンも1人に1つつ渡された。それ以外の物資は必要に応じて渡すと言った。老人達が賢と梓に名前を訪ねたが、賢は名乗らなかった。

「係の者ですから、心配しないでください」

ふたりは公民館を後にし、先ほどの空き地に戻ってテレポーターションした。

「原さん、1人で大変だったでしょう」

賢が言うと、原はにこにこしていた。

「毛布が大きすぎたので、小さくするのが少し大変でしたけど、まあたいしたことはありませんよ。次は西伊豆の海岸に孤立している地域がありますから、そこに行って頂けませんか？」

原が言うとふたりは合意した。下田の北西にある雲見地区だった。位置情報を確認して、賢と梓は直ぐに国道に面した雲見の食堂前の広い駐車場にテレポーターションした。潮の香りがする。月の明かりが海岸沿いに海の中に突き出るように鎮座している小山を浮き上がらせている。小山の左端に突出している鋭い角のような巖まではっきり分かった。先ほどの寸又峡では暗く感じていた月の光が、雲見では明るくさえ感じられた。まず通信インフラの確認をした。スマホは使えるようだ。外に人影

は無かった。食堂には灯りが点いている。ここは停電していないようだった。ふたりは食堂に向かって歩いて行き、入口の扉を開けた。

「誰かな？お客さん・・・なんてこと、ありっこないし・・・」

「夜分、済みません」

賢が言うと、奥から40歳前後の主婦の様な感じの女性が姿を現した。

「あんたら、どこん人？民宿のお客さん？こんな夜にどうしたの？」

「雲見が孤立しているって聞いて、救援に来たのですが、被害の状況はどの程度か教えて頂けないでしょうか？」

壊れたテーブルと椅子が食堂の隅に積み上げられている。横に設けられた座敷の畳の上に、割れた瀬戸物の置物がいくつも並べられていて、壁から落ちたと思われる写真の額が5、6枚立て掛けてある。そんな荒れ果てた食堂の壁に、吊し雛が飾られていた。ふたりは心なしかほっとした。婦人は言った。

「被害、そりゃ酷いなんてもんじゃないわね。舟は全部やられちゃったし、古い家は大抵壊れちゃったよ。国道は通れなくなっちゃったし、みんなどうすんのかな？1週間は持つかも知れないけどね。水道が断水で水が無いからね。その上、川の水も井戸の水も涸れちゃったんだよ。塩水は溢れるほどあるけど、塩っぱくて飲めやしないし・・・」

「生活用品はあるのでしょうか」

梓が訪ねると、奥から一人の老婆が姿を顕した。

「そりゃ、ここんところにある店なんてのは小っこいから、直ぐに売り切れちゃうし、松崎や下田まで出れなくなったんじゃね」

老婆が後を受けて言った。

「はやあ人じゃ、あと2日もたにやあらね」

「一寸お尋ねしてもいいですか？」

「なんかね？」

「この辺りの人が使う飲料水用の貯水所みたいなところは無いのですか？」

「そりゃ1カ所、共同の貯水所があるにやあるけど、あの貯水所の水は直ぐになくなっちゃったよ。皆そこへ水貰いに行ったからね。そうそ

う、海に近い「魚かつ」って魚屋が貯水槽を持ってるっけ。だけど、あそこの水槽もダメになったとか言ってたな」

賢と梓は貯水場の位置を詳しく聞くと、一旦食堂を出て駐車場の端で原からトイレトペーパー200個とティッシュペーパー100箱を送ってもらった。それを食堂に持って行った。先ほどの婦人が驚いて言った。

「お客さん、どうしたんですか？」

「ええ、雲見用に用意しておいた分です。では、これからその貯水場を見せてもらってから帰ります。明日の朝、蛇口から水が出るかどうか確認してみてください。明日の朝からですよ。それから、水が溢れ出したりタンクが空になったら、ここに電話してください」

賢は自分の名前と、スマホの電話番号だけを書いた紙を婦人に渡した。店を出るとふたりは空中浮揚して貯水場を探した。直ぐに見付かった。それは海沿いの林の中にあった。賢は水を供給できる箇所を調べた。給水はタンクの上部から行うようになっていて、同時に雨水を濾過して使うような給水口も設けられていた。賢はそのタンクの横に付いている梯子をよじ登って給水口を開いた。それから給水タンクの立体位置を正確に計測して、梓と共にテレポーションで家に戻った。

リビングに戻るとふたりは直ぐに趣味の部屋に向かった。原は物質転送機を操作していた。賢と梓が入って来たのに気付くと原が言った。

「ご苦労様でした。水の件はどうなりましたか？」

「ええ、住民共用の給水所があるようなんです。そこのタンクも空になってしまっていますので、そこに向けて水を送ってやったらいいと思います。でも、連続して送ることができるのでしょうか？」

「それは大丈夫です。間欠運転の機能がありますから。でも、連続して送ったらタンクが溢れてしまわないかな？」

「僕もそれが気になって、溢れ出てもいいように上の給水口を開けてきましたよ」

「そうだったんですか。それで、給水口のcockを開けたのですね。わたし、何故かしらと思いました。でも、どうやって水を送るのですか？」

「取り敢えず台所のシンクに鍋を置いて、そこに水道の水を出しっ放し

にするのです。それを、一定時間経過毎に転送するんです。勿論水だけです。転送領域を鍋の内側の水の領域だけに絞り込みます。先ほど実験してみたんです。上手くいきましたよ。バスタブに送ってみたのですが、水が上手く溜まっていきました。賢さん、転送先の位置情報は大丈夫ですね」

「ええ、緯度、経度、高度の情報を別々に測定して、この端末にセットしてきました。タンクの中の中心部分になると思います。2000リットルほどのタンクです」

「それですと、満タンにするのに2時間は掛かるでしょうね。梓さん、済みません。暫くは台所のシンクは使えなくなってしまうんですが」

「原さん、鍋は洗面所のシンクに置いた方がいいと思いますよ。あそこの水も飲料水ですから」

「そうですか？知りませんでした。つい東京の感覚になってしまって」

「北海道は世界中の水ビジネスの会社から狙われるほど水がきれいなんですよ」

梓が言った。

この日の救援活動はここまでとした。賢と原は洗面所に鍋を移動して、位置情報を確認し直し、実験的にシンクの水を出して、バスタブに転送してみた。水が渦を巻いてバスタブに溜まっていった。それは不思議な光景だった。その様子を見て梓が喜んだ。

「すごいわ！何でも送れるの？」

「そう、何でも送れる。凄いけど危険なマシンだよ」

賢が結んでいた口を重そうに開いてぼそぼそと言った。

「そうなんです。この装置は考えようによっては、原爆より恐ろしい兵器を生み出せる可能性があるのです。邪魔な存在を消滅させたりできますからね」

「そう、ある領域に入ってきた敵の戦闘機を、全部海の中に放り込むことだって出来るし、逆に敵陣の兵器を自陣に転送して横取りしてしまうこともできる。きっと馬鹿らしくなって戦争は無くなるね。このマシンの応用範囲は無限で、考えたらきりが無い」

「ですから、このマシンの設計図は書かなかったんです。それに、誰にも真似できないように、トリプル・ループ・エンクリプション技法という手法でソフトウェアを絶対解読できないようにしてあります。解読された時には、ソフトが自己消滅するようなC-MOS・RAMを使った仕組みも組み込んであります。ハードも特別の暗号情報をランダム発生的な手順で入力しないと、解読できない超LSIを使っています。設計関係者の誰かが拉致でもされない限り大丈夫でしょう。アインシュタインの過ちは2度と繰り返してはなりませんからね」

賢と原は洗面所のシンクの蛇口を開き、物質転送機を2時間の自動運転にセットして雲見への給水を開始した。3人は入浴を済ませてから床に着いた。

翌朝、賢と原が身支度を調べて、リビングのソファに腰掛けて居ると賢のスマホが鳴った。食堂の婦人からだった。

「もしもし、こちら雲見の食堂の者ですが、昨日はありがとうございます。今朝、貯水所のタンクが満タンになってました。蛇口をひねると水が出てきました。あの一、誰が水を供給してくれたのですか？」

「救助隊ですよ。町内の人たちに教えてあげてください」

「はい、昨日のうちに、みんなに言い継ぎしときましたから、今朝になって蛇口の前に列ができてました」

「それはよかったです。タンクが空になったらまた連絡ください」

「分かりました」

賢が原と梓に電話の内容を説明するとふたりは喜んだ。この日も賢と原は救援活動に明け暮れた。孤立地域に水を送るやり方も板に附いてきた。しかし賢の家からの給水だけではとても足りなくなってきた、一時混乱も生じたが、地域内で水の配給のルールを作り、自治体による自主運用を始めてからは震災前の落ち着きを取り戻したようだった。

虎ノ門

賢は時間を見て、原と新しい会社の運営について相談を重ねた。原は自分の全財産を投資すると言った。全財産といっても、貯金は500万円程度しかなかった。しかし、OVSの売り上げが好調で収入が鰻登りに上昇していたので、給与の大半を投資に向けることで、新会社が上手く離陸できる目途が立ってきた。救援活動も順調に進み、国の特別災害対策本部や県の災害復旧本部によるライフラインの復興が進み、賢の家から供給していた水も木曜日一杯で必要が無くなっていた。3人は木曜日の夕刻をもって人命救助活動の支援を一応終了することにした。金曜日、賢は久しぶりに梓と一緒に出社した。それは賢にとって東領製作所勤務の最終日だった。原はこの日の昼の便で一旦東京に戻ることにした。賢がエレベータを降りると、丁度総務部長の神佐川と出くわした。

「内観さん、いよいよ最終日ですね。東海地震の救命活動で大分ご活躍のようでしたが、ああいうことは、ご自身のご意志で為されていらっしゃるのですか？」

「おはようございます。どうして、僕らのことをご存じですか？」

「どうしてって、テレビにあれだけ出ていれば、どんな人だって有名になりますよ。それに内観さんは失踪事件の解明にも随分関わっていらっしゃるようですし……」

「はあ？」

賢は何も応えずにそのまま自分のオフィスに向かった。康子が席に着いていた。

「雪坂さん、おはようございます」

康子はPCを眺めたまま、ただ「おはようございます」と応えただけだった。賢もそれ以上の言葉を掛けなかった。PCを開くと300通を超えるメールが届いていた。その大半は賢の救命活動についてだった。賢はそれらのメールに応答するのは止めた。それ以外にはMIプロジェクトのメンバーから惜別のメールが33通届いていた。それらには、お礼や、別れの言葉を添えて返信した。メールの中に3通、差出人の分からないメールがあった。そのメールを開くとそれはヴェポライズ・メールだった。

「内観様 あなたのなさろうとしていることは、許されないことです。このままあなた自身の退職や関係する者達の退職を強行されると、あなたの身によからぬことが起きるかも知れません。一応、ご忠告申し上げておきます。 MI-P J関係者より」

読み終わるとメールは自動消滅した。他の2通の不審なメールも賢に対する警告を含んでいた。

「内観賢様

これまで、あなたの行動をずっと観察していました。あなたが当社に入社されてから、まだ1年も経過していません。しかし、あなたの行ってきたことは、会社に様々な形で影響を与えました。これまでの会社勤務のあり方に、疑問を感じ始めた者達も少なくありません。そういう意味でも、貴方の行動は当社のためになったことばかりとは言えません。これまでの当社のあり方を否定するような行動も多々ありました。特にあなたの海外での行動は、見逃すことができないような内容を含んでいます。あなたは一体、何の為に当社に入社されたのでしょうか？そして今、どういう理由で、無責任にも道半ばにして当社を退社されてゆくのでしょうか？会社の行った非情な人事に対する単なる抵抗とは到底思えません。あなたの取ってきた行動、これから取ろうとしている行動はいずれも、我々愛社精神に溢れた者達に反発心を抱かせます。このまま見過ごすことは出来ません。 一社員より」

「内観賢様

このメールで君に言っておきたいことがあります。僕は君の取っている行動が、どうやら博愛精神に則っているらしいと感じていますが、それは、必ずしも愛を注がれた人の為になっているとは限らないのです。君が愛情を掛けると、君の愛情を受けた者は、その愛情に対して情を起し執着するのです。特に相手が女性の場合はその傾向が強いです。君の行為でどれだけの人たちが苦しんでいるか分かって欲しいと思います。君の存在が苦しみになっていることもあることを理解してください。

一人の男より」

賢はこのメールは女性からだと思った。最初の2通のメールには何処か

賢に対する否定的な要素があるのを感じたが、最後のメールの文面には、明らかに前の2通とは異なった心の動きを感じた。3通のメールの送信者を透視してみたが、LANを経由したメールからは透視に必要なエネルギーは得られなかった。メールの整理が済むと、賢はこれまで関係した社内外の人たちに対して退社の挨拶メールを送信した。それから自分の作成してきたデータがサーバに保存されていることを確認し、PC上の一時記憶を全て消去した。賢は康子の視線を感じてふと顔を上げた。康子は賢の動きで直ぐに顔をPCに向けてしまった。賢が小用でトイレに行く為にオフィスを出ると、いずこからか鋭い視線を感じた。辺りを見廻してみたが、確認することはできなかった。賢が席に戻ると、電話が鳴った。呼び出し音が外線であることを示している。

「もしもし、東領製作所北海道支社の内観です」

「内観君か？私だ」

藤代社長からだった。

「社長、いろいろお世話になりました。今日で退職させていただきます」

「君、それは身勝手じゃないか？まだプロジェクトは始まったばかりじゃないか」

「はい。大変申し訳なく思っております」

「一身上の都合とは、一体何なのだね。全て中途半端のままじゃないかね。まだ亜希子のことも行方知れずのままだし、君には責任感というのが無いのかね」

「申し訳ありません」

「君は、本当は亜希子のことも、祐子のことも知っているんじゃないのか？君は最近、空中から物を出したり、空を飛んだり、瞬間移動したり、マジックの様なことばかりやっているという話じゃないか。君は一体何者なんだね」

「僕は普通の男です。それは貴方もよくご存じでしょう。少し他の人と違うことができるだけです。そういうことはどの人にもあることでしょう」

「いや、そんなことはない。君は他の者のやれないことをやる。それを

さも誰でもできることのように言う。君の言動でどれだけの者が惑わされているか分かるか？地震の救助活動だってそうだ。多くの救援隊の者達がどれ程、無力感を味わったか分かるか？君にはそういう繊細な心というものが無いんだ。自分では人を助けたつもりでいるかも知れないが、そのために苦しんでいる者達がいるということを知りなさい。私も今では君をプロジェクトのリーダーに据えたのは誤りだったと後悔している。大切な2人の娘を奪われ、国家プロジェクトでも当社の主導的立場を失い、従業員は物作りへの意欲を喪失しつつある。この責任の大きさを、君はどう捉えているのだ」

「社長、それは貴方の望んでいたことじゃないですか？物質中心主義を精神重視の世界に誘導してゆくこと、そして、それを国のレベルまで拡大してゆくこと、それが僕を採用頂いた理由だったと思いますが・・・」

「それは詭弁というものだ。私は、自分の会社にまで影響を与えて欲しいなどとは思っていなかった。当社の社員となった君が、当社に対して恩を仇で返すような真似をするとは思いませんでした」

「僕は、そんなつもりはありません。しかし、物質中心のものの考え方を変えると、当然このようなことは起きてくると思います。社としても方向性を変える必要があると思います」

「君の意見など聞きたくない。そんなことより娘達のことはどうしてくれるのだ？私の妻は自分のお腹を痛めた亜希子と優しい祐子を失った悲しみに、今では病の床に伏してしまっている。これもみんな君の所為だろう。それでも君を社員として残している私の親心も分からず、勝手に退職するなど、君のしていることには虫唾が走る」

「申し訳ありません。奥様はお体の具合が悪いのでしょうか？」

「君には心配して欲しくない。それとも亜希子や祐子に母親の容態を連絡してくれるとでも言うのかね？」

賢は黙ってしまった。これ以上話を続けると、祐子と亜希子の所在を感付かれてしまいそうな危険性を感じた。

「なんとか言わないのか？」

賢はそれ以降一言も応えなかった。藤代はとうとう憤慨して受話器を置いた。賢は登喜子を透視してみた。藤代の言うとおりに、登喜子はベッドに横たわっているようだった。しかし、その3時限的な位置がどこかは分からなかった。登喜子の意識は悲哀と絶望感に苛まれていた。登喜子には何の罪もない。新たに養女にした祐子の失踪、そして亜希子の事実上の家出。登喜子は生きる意欲を失っていた。登喜子の周りには心の通い合う友達がいなかった。亜希子と祐子だけが登喜子の心の支えだった。そのふたりを失った今、何をもってしても気持ちを高揚させることはできなかった。賢は登喜子の心の動きを読んだ。悲しみからくる絶望感が身体にまで及んでいるようで、肺気腫を患っているようだった。賢は自分自身の体をオフィスに置いたまま、意識を身体から抜いて登喜子の元に移し、そこに自分の幽体を顕現させた。登喜子は個室のベッドに一人きりで横たわっていて呼吸器を付けていた。目を瞑っている。賢は静かに話し掛けた。

「奥様、内観です」

登喜子は気付いたようだが目を瞑ったままである。

「奥様、内観賢です。亜希子さんと祐子さんのことですが・・・」

そこまで言い掛けると登喜子は目を開けた。しかし又直ぐに目を閉じてしまった。

「奥様、亜希子さんも祐子さんもご無事です。ご安心ください」

登喜子は再び目を開けた。手で呼吸器のマスクを外した。2、3度力の無い咳をして、棄てられた子猫のような声で言った。

「内観さん・・・ほっ、本当ですか？」

「はい、本当です。おふたりともお元気です。お気を強く持たれて、肺の病が回復に向かっていると思ってください。意識をご自分の肺に集中して、肺の細胞一つ一つが正常な形に戻ってきているところを想定してください。もう、次第に治り始めています」

賢は想念で登喜子の胸の上に両手を翳し、プラナーを供給した。そして肺の内部を内視し、細胞に元の形に戻るように語り掛けた。細胞達は次第に力を取り戻してきた。房状にふくれあがった細胞組織が引き締まっ

てきて、元の形に戻っていった。

「内観さん、ありがとう。呼吸が楽になってきました。亜希子達はどこに居るのでしょうか？どうしているのでしょうか？」

「それは申し上げられませんが、無事でしかも元気でいらっしゃることは確かです。奥様が回復されたら、おふたりにお会いになれるようにお取りはからしいいたします。ですから、早く元気になってください」

「本当に、亜希子や祐子に会わせて頂けるのですね？」

「ええ、お約束します」

入口のドアをノックする音がした。賢は幽体を消して様子を窺っていた。医師の往診だった。医師は2人の看護婦を伴って入室して来た。

「藤代さん、検診の時間です。あっ、呼吸器を外してしまっただけじゃないです。貴女の肺は呼吸能力が低下しているのですから」

「先生、おかげさまで、大分楽になってきました」

「それはよかったですね。でも、病状がそんなに急に回復するはずはないですよ。先ず脈を見せてください……うん、確かに脈拍が上がって、しかも力強くなっている。そうですね、後でレントゲンを撮ってみましょう」

賢は意識を自分の肉体に戻した。メールを見ようとしてPCを操作すると、梓が近くに来て言った。

「どうしたのですか？どこか具合でも悪かったのですか？全く動かなくて、それに私が話し掛けても、応答が無かったんですよ」

「いや、なんでもないよ。一寸ば一っとしていただけだから」

「それならいいのですが……」

賢はその場で梓に説明することを躊躇した。30分ほどして再び藤代から電話が掛かってきた。

「内観君、君は妻の所に行ったのかね？」

「社長、僕の身体がここにあったことは、貴方が一番よくご存じじゃないですか」

「たしかに、1時間やそこらで札幌と東京を往復できるはずはない。ま

た、変なマジックを使ったんじゃないかね。妻から電話があったんだ。君が来たって」

「奥様がお電話されたとおっしゃいましたが、ご容態は如何ですか？」

「うん、急に回復して肺の細胞が正常に戻ったようだ。それより君は妻の所に行ったんだろう？」

「僕の身体はここにありました。確かに意識は奥様の所に伺って、お見舞い申し上げましたが・・・」

「やはり、そうか。君は娘達のことを知っているようじゃないか？妻を娘達に会わせると約束したそうじゃないか」

「それは、奥様の悲しみを取り除き、胸の病を回復させるための方法です。奥様の歎びの感情が、肉体に影響して直ぐに効果が現れたのだと思います」

「そうか、そういうことだったのか。しかし、後で、妻には何と言いつけるんだ」

「僕の肉体がここに在ったことを、社長はよくご存じのはずです」

「うむ・・・分かった」

藤代は賢が方便を使って、登喜子の精神状態を安定させ、病状を回復に誘導したのだと考えた。

その日の昼食は梓が賢と康子を誘って札幌ラーメンを食べに出た。事務所からは少し離れていたが、3人は賢のレンタカーでラーメン横町まで出掛けた。康子は終始無口だった。何か話し掛けても、ただ頷くか首を横に振るだけで言葉での返答はしなかった。食事が済んで3人が駐車場に向かって歩いていると、前方から歩いて来た一人の4、50歳の背広を着た小柄な男性がすぐ近くまで来て、賢に向かって言った。

「あなたは、東海地震で救命活動をしていた方じゃないですか？」

「はい、そうですが・・・」

「やはりそうでしたか、私の家族が沼津の原にある団地に住んでいまして、貴方に助けられたようだというものですから、是非一度お逢いしてお礼を申し上げたいと思っていたのです。こんな所でお逢いできるとは思ってもありませんでした。どこかでお礼にお食事でも差し上げたいと思

うのですが・・・」

「ありがとうございます。でも今、食事したばかりですので、お心だけいただきます」

「それでは私の気持ちが済みません。今晚私にご馳走をさせて頂けないでしょうか？」

「でも、私たちはいろいろやらなくてはならないことがありますので」

「ほんの少しの時間でも構いません」

あまりに執拗なので、賢は言った。

「1時間ほどでよろしければ、退社後にお言葉に甘えて、ご一緒させて頂きます」

梓は賢に断って欲しかったが、賢が男の申し出を受けてしまったので、仕方なく賢に附いてすすき野の料亭に行くことにした。康子は一人離れていて無関心を決め込んでいた。

賢は午後、退職のための最終手続きを行い、全ての個人情報の削除を行った。康子と共に総務部に行き、退職に関する注意事項などの説明を受け、手持ちの貸借物を返還した。退職の準備が整ったのは終業1時間前だった。それまで黙っていた康子が口を開いた。

「内観部長、少し相談したいことがありますがお時間を頂けないでしょうか？」

賢は承知した。空いている会議室を探しふたりでそこに入った。

「康子、どうしたんだ。これからのことか？」

「ええ、そうです。私はあなたに附いてゆくために、会社を退社することに決めました。でも、あなたには沢山の女性がいて、私なんて眼中にないようなので、今どうしたらいいのか迷っています。それでも貴方に縋り付いてゆくべきか、それともあなたのことを諦めて離れてゆくべきか・・・」

「どうして、そんな風に決めつけなくてはならないんだ？僕のことが好きなら一緒にいたらいいじゃないか、厭なら離れればいいし。僕は君のことは大好きだよ。だけど他の人のことも大好きだ」

「そんなこと、この社会では許されません。あなたは女を不幸にします」

「確かに、僕は康子に近付き過ぎたかも知れない。もう少し離れていればよかったのかも知れないね。君が近くにいて素敵だったから、愛してしまった。いや君の容姿に惹かれたんじゃない。君という存在に惹かれたんだ。僕はそういう男だよ。ごめん、許してくれ」

「あなたは、生身の私を抱きませんでした。でも私は心の中で抱かれました。だから、苦しいのです。あなたが優しいから……」

「それで、今後どうしたいんだ？」

「あなたと一緒にいたい。だけど、あなたには他の人と一緒にいて欲しくない。私だけのためにいて欲しい……無理ですよ。だから、私はあなたの前から姿を消すことにしました。私はこの土地を離れます。あなたにその気があれば、私を見つけることは簡単でしょう」

「君は天涯孤独じゃないか。折角住み慣れたこの土地を離れたら、どんな大変な人生が待っているか知らないぞ。僕のことを忘れてこの土地に残った方がいいのじゃないか？」

「それは私の勝手です。短い間でしたがありがとうございました」

康子は終業時間になると一人席を立ち、ロッカールームに向かった。康子の居た席のデスクの上には何も載っていない。康子がそこに居たことすら感じられなかった。賢は一抹の寂しさを感じた。賢はそのまま瞑目して梓の仕事が片づくのを待った。15分ほどして梓は漸く仕事を切り上げることができた。賢の机の上からも、賢が居た痕跡はすっかり無くなった。ふたりは車で支社を出た。駐車場に車を停めて指定された料亭の暖簾を潜った。料亭とは謂っても複合ビルの4階にある店だった。ふたりが店に入ると、昼に会った男が立って待っていた。

「いらしてくださって、ありがとうございます」

男は2人を案内して奥に入って行った。既に料理の用意が出来ていて、男が手を打つと、女将が徳利を持って来た。

「このたびは本当にありがとうございました。さあ、先ず一献傾けてください」

賢は男の杯を受けた。梓は車の運転があると言って酒は断った。

「私の妻があつた団地に一人暮らししていたのです。私も札幌の郊外にア

パート住まいしています。2重生活で厳しいのですが、何とかここまで夫婦を続けてくることができました。お互いに一人での生活は本当に無駄の多い生活ですが、どちらも会社を辞められないのです。一旦止めてしまったら生活は成り立たなくなります。いずれわたしも沼津に戻れると思いますのでじっと我慢しています。そんな折の大地震だったので、私は直ぐにでも駆け付けたかったのですが、仕事の関係でそれができませんでした。だから、妻が無事であることを祈っていたのです。でも電話が通じなかったのです。テレビで妻の住んでいる団地のビルが地盤の液状化現象の影響で横転したと知ってとても苦しかったのです。あなたが妻を助けてくださらなかったら、私は生きてはいられませんでした」

「そんなことはありませんよ。あそこには救助隊の方々がいらっしゃったから、僕たちが助けなくても、どなたかが助けてくださったでしょう。あの、神様を拝んでおられた方ですよ」

「はい、妻が申すには、あなたは神様だと・・・あっ、気が付かなくて済みません、どうぞ料理をお召し上がりください」

「ありがとうございます。僕はこの通り普通の人間です。変わったところはありませんよ」

「でも、妻が言うには、あなたはテレポーテーションができ、空中浮揚ができ、物質化もできるので神様以外に考えられないと」

賢はこの男性がどうして、物質化のことまで知っているのかと思った。でもそんなことは知っていようがいまいが、どうでもいいことだった。

「お仕事の方はまだお忙しいのですか？奥様の所にいらしてあげたらいかがですか？」

「私が行くと言いましたら、飛行機代が勿体ないから、来なくてもいいと妻に言われました」

「そうですか。でも奥様はお住まいを無くされて困っておいでではないでしょうか？」

「大丈夫だと申しておりました。ですから、ご心配なさないでください。失礼ばかりで申し訳ないのですが、あなたのお名前を伺わせて頂けますか？」

「内観賢です」

「えっ？あの失踪事件を解決されている内観さんだったのですか？」

「ええ」

「内観さんはいろいろな失踪事件を追っておられると伺いました。以前フィアンセの方、そう崎野祐子さんとおっしゃる方があなたが失踪されたときにあなたを救ったという話を聞いたことがあります。この世界は人が簡単に失踪したり元に戻ったりする、そんな風になってきているのでしょうか？」

賢は話の方向が自分に向いてきたので、方向を変えようと思った。

「そんなこと、どこで聞いたのですか？」

「妻から聞きました。妻はあなたのことを神様と思って、WEBなどでいろいろ調べたようです。あなたは亜希子さんとおっしゃる方と一緒に失踪されたのですよね」

「どうして、そんなことまでお話ししなくてはならないのですか？」

賢がそう言うと、すかさず梓が間に入って言った。

「失礼ですが、あなたのお名前は何とおっしゃるのですか？」

「申し遅れましたが、私は鈴木一郎と申します」

「どちらにお勤めですか？」

「三伏車体に勤めています」

「どうして、内観さんのことをそれほど知りたがるのですか？」

「はい、妻が内観さんは神様だと・・・」

「もう、この方のことをあまり詮索しないでください」

賢は梓が直接的に鈴木という男に食って掛かってくれたことで、ほっとした。そして、原団地で救い出した女性も確かに鈴木と言う名前だったことを思い出した。

「奥様のご容態は如何ですか？確か捻挫され・・・」

「え、ええ、もう大分いいようです。貴方のおかげで直ぐに手当してもらったので、もう支障なく歩けるようになったと言っていました」

賢はこの男性が別の意図を持って自分に接近していることを知った。原

団地から救い出した女性は、何も怪我をしていなかった。誘導尋問に引っ掛かったと思った。

「今日のご接待頂きましてありがとうございます。私どもはこれからやらなくてはならないことがありますので、これで失礼させていただきます」

「えっ？もう、お帰りにならなくてはいけないのですか？まだ30分ほどしか経っていませんし、大したおもてなしもできていませんのに。余計なお話をしてご気分を損ねたら、申し訳ありません。お酒も入りましたから、こちらでご自宅までお送りいたし・・・」

「いいえ、結構です。車で来ました。私が運転して帰りますから、どうぞお気遣い無く」

梓がきっぱりと言った。ふたりは何とか引き留めようとする鈴木を振り切って早々に引き上げた。駐車場に行き車を出すと、梓はいつもの274号線に入るために一旦札幌江別通に入った。大谷地方面に向かって行くと、賢は2台後ろのライトバンの動きが不自然なことに気付いた。明らかに尾行されている。

「梓、^{つげ}追跡られている。廻り道をしよう」

「わかりました。どちらに行きましょうか？」

「札幌南インターから道央自動車道に入っちゃおう」

梓はアクセルをふかした。3台の車を追い越したが、ライトバンは執拗に附いて来た。

「梓、いいか、俺の言うとおりに運転しろよ。今、道路は空いている。ほらあのライトバンが^{つげ}追跡てくる。やっぱり道央高速に入って来た。千歳恵庭のジャンクションで左に抜けるけど、いいか、直進すると見せかけてぎりぎりまで行ってから、いきなり分離帯を横切って左側の車線に入る。出来るか？分離する寸前まで引き付けておいて左に抜けるんだ。スピードを出しておいて、抜ける寸前に急にブレーキを踏む。それから急ハンドルを切る」

「あまり自信ないけど、やってみるわ」

千歳恵庭のジャンクションが近付いた。梓はアクセルを踏んだ。ライトバンも遅れずに附いて来る。分岐点を通り過ぎ、左側の車線が離れてゆ

く。賢が言った。

「今だ、ブレーキを踏んで左に抜けて」

梓は、急ブレーキを踏んだ。後続のライトバンは追突を避けるために、いきなり右側の車線に入った。梓は直ぐに左にハンドルを切った。分岐点ぎりぎりの所で夕張方面の車線に入ることができた。

「はあーっ、私、汗びっしょり」

「よくやった！ありがとうございます。さあ、落ち着いて2つ目の出口を降りるよ。追分町インターだ」

梓は本当に掌が汗でびっしょり濡れているのを感じていた。ふたりは家に着くとソファーにどっかりと腰を降ろした。

「まだ、胸がドキドキしているわ。私って凄いですね、こんな運転ができるのだから」

「うん、凄いよ。運動神経あるじゃないか」

「でも、もう2度とこんな運転はしたくありません」

「ごめんね。ぼくは直ぐに人を信用してしまうから、君をこんな危ない目に遭わせてしまって・・・」

梓は賢に身を寄せた。賢は梓を抱きしめた。

「あなた、あの人は一体誰なんでしょう？」

「少し、透視してみようか」

賢は意識を男に向けようとした。しかし、どうしても男の特徴が抽出できない。諦めざるを得なかった。

「あなた、今夜は貴方のお部屋に伺ってもよろしいですか？お話ししながら休みたいのです」

山梨

賢は了解した。先ず入浴を済ませ、それからムクウとの通信を行うことにした。リビングの壁際にはティッシュペーパーが200箱ほど山積みになって残っている。他の支援物資は全て被災者の元に送ったが、ティ

ッシュペーパーだけが残ってしまった。賢が浴室に向かった後、梓は山積みされたティッシュペーパーをぼーっと見つめていたが、ふと思い出したようにテレビのスイッチを入れた。東海地震のニュースが流れていた。救援隊の努力によって、生存者の救出はほぼ完了していたが、一ヶ所だけ、どうしても救出が進まない場所があるとキャスターが説明していた。それは山梨県の乙女鉱山の坑内に閉じ込められた人たちの救出だった。地震で坑道の中央部が崩落し、14人の脱出が不可能になっていて、現在も進められている坑道を切り開く工事は、更に1週間以上掛かる見込みだとキャスターは悲壮感を漂わせながら説明していた。坑道入口は立ち入り禁止になっているが、その廻りを取り囲むように大勢の人たちが押し掛けていた。小型のショベルカーを使っての工事も、しばしば起こる余震で中断を余儀なくされていた。この鉱山を所有している水晶販売会社の社長でOVSのユーザーの一人が、マシンを持ち込んで、中の人との交信を試みていたが、どうしてもコンタクトすることができなかつた。最大の懸念は坑内に閉じ込められた人たちの安否だった。どんな方法を用いても全くコンタクトできなかつたので、生死すら不明な状態にあった。梓は賢の寝室に入り、チェストから衣類を一式取り出して直ぐに浴室に跳んで行った。浴室の扉を半開きにして、大声で言った。「あなた、大変です。山梨の鉱山にまだ救出されていない人たちがいます。もう1週間になろうというのに、坑内に閉じ込められたままのようです。どうしましょう？」

「直ぐに出るよ。梓、一緒に行こう。梓がOVSを操作するんだぞ」

「OVSを使って中の人たちと交信をしようとした人がいるらしいのですが、誰とも交信できないようなのです」

直ぐに浴室から出て来た賢にタオルを手渡しながら梓が言った。賢は梓の持って来た衣類を身に着けてから、急いで趣味の部屋に戻ると先ずPCを使って鉱山の位置を確認した。それから梓を連れて坑道の入口前にテレポーテーションした。実体化するとき坑道方向から来る強いエネルギーの波を感じ、危うく次元の場を捉え損なうところだった。何とかして現次元を捉え、坑道の前の木立の影に出現することができた。

「梓、俺はこれからOVSを取りに戻るよ」

「あなた、少し待ってください。あの人混みの中の何処かにOVSを持ち込んでいる人が居るはずですから、その人からOVSを借りたらいいいと思いますけど・・・」

「うん、だけどOVSの機能が最新版になっているかどうか分からないから、取りあえず取って来るよ」

そう言うのと賢は一旦家に戻り、OVSを抱えて再びテレポーションした。梓の元に現れようとしたが、今度はもっと強いエネルギーの流れを感じて現空間に出現できず、一旦幽界に身を置いた。果たしてそこには様々な存在がたむろしていた。それらは人間と謂うより、動物に近い存在のように賢には思えた。それらの動物たちが強い念を発して、その念のエネルギーで坑道の周囲の空間に歪みを創り出しているようだった。賢はそのエネルギーの流れの影響を受けないように、幽界の中に現象界と同じように存在している坑道から100メートルほど離れた場所を探し、現空間の道路上に実体化した。着地するとOVSを抱えて小走りで梓の所まで行った。

「梓、この辺りは、空間の歪みが酷い。この空間の歪みが人の意識にも作用しているんじゃないかな。だからきっと、OVSで対象者の意識を捉えることができないでいるんだ。君と一緒に来てくれてよかった。僕は何とか坑道の中に入り込むから、君はOVSで人々の意識を追ってこないか？あの人だかりの中に、坑道内の人々と知り合いの人たちがいるだろうから、その人たちから坑内の人たちについての情報を得て、一人一人当たってみてくれないか。けどもし自分が危険だと思ったら、それ以上コンタクトを続けないで直ぐにスイッチを切るんだぞ」

「はい、分かりました。あなたも気を付けてくださいね。落盤だけでも危険すぎるのに、空間まで歪んでいるのでは、あなたが目的の場所にテレポーションできるかどうか心配です」

「でも、やってみる。万一僕が戻れなくなったら、OVSで僕を呼んで欲しい。そして、僕を引き戻すように意念を働かせて欲しい。その時は梓の身体を、その木に縛り付けてやるんだよ。いいね」

「はい、分かりました」

賢は瞑想状態になって意識を坑道の中に移そうとした。しかし、坑道は時空間の歪みの為に、意識を真直ぐに進めることができない。どうしても坑道の入口で押し戻されてしまった。賢は意識を一旦幽界に移動させた。そこには顔が猿に似ていて、皮膚が鱗の様な一見爬虫類に見える動物が居た。動物たちはまるでオオカミのように牙を剥き出して、周囲に威嚇の感情をまき散らしている。どう見ても100匹以上居る。爬虫類に似た動物たちの後方に着物を着飾った一見美しく見える女性達が居た。女性の一人が大きな口を開けた。その大きさは自分の顔をも呑み込めるほどのものだった。指の先には長く鋭い爪が出ている。数えてみると女性達は20人ほどのようだ。その後方に長い尾を振り回している大きなムカデのような動物が居て互いに争っている。その動物たちは5, 6匹居る。その後方にも見たこともない大きな翼を持った恐竜のような攻撃的な雰囲気を漂わせた動物が居る。それらはどれも人の意識が創り出した妖怪の様な存在だと賢は思った。どこか最近流行しているスマホゲーム、ヨウカイGOに出てくる妖怪達に似ていた。坑道はその動物たちの後方に続いていた。賢は自分とその動物たちの意識の波長が異なっていると確信していたので、妖怪たちに構わずに、坑道に向かって歩き始めた。空間的に近付けば動物たちは消えるか飛散するだろうと思っていた。しかし、賢が10メートルほどの距離まで近寄っても、動物たちは一向に逃げ出す様子はない。寧ろ、賢に向かって剥き出した牙のある口を大きく開いたり、爪の出た手を振りかざしたりして、今にも襲い掛かって来そうだった。賢は意識を集中させて、坑道の中に1本の直径1メートルほどの透明なチューブ状の通路を顕現させた。幽界の中ではそれは難しいことではなかった。幸い賢の行った物質化は空間の歪みの影響を受けていないようだった。そのチューブが動物たちを押し退けるように坑道の奥に向かって伸びていった。妖怪達からは透明なチューブが認識できないようで、自分たちの間に無理矢理割り込んで来た異様な力に反発し、チューブ越しに見える反対側の動物に襲い掛かろうとして、チューブの表面で滑ったり転げたりしている。賢は出来上がったチュー

ブの中を突き進んで行った。周囲に見える光景はあまり気持ちのよいものではなかったが恐怖は感じなかった。チューブは大きな岩の手前まで続いていた。賢はその岩の手前まで来てチューブから出た。辺りは漆黒の闇なのだが、周囲にある存在は認識できた。賢はその岩の先に対して透視を試みた。しかし、できなかった。岩自体が大きな意識の障壁であることに気付いた。それは何か別の存在の意志によってもたらされているようだった。賢はその岩を消そうとした。しかし強い念波で動かすことができない。それどころか嵐のような荒れ狂った激情と、憎しみの怨念が賢に襲い掛かって来た。賢はそれを無視してムクウの教えてくれたように奥に取り残された人たちに向けて意識的に強く愛と慈悲の心を拡大した。周囲の壁面ががらがらと崩れ始めた。岩が融けるように崩れてゆく。やがて奥に人々の存在が感じられるようになってきた。賢はチューブを延長するように意識を働かせた。岩のあった場所を突き抜けて人々が蹲っている手前までチューブは伸びた。チューブの上に岩ががらがらと音を立てて落ちて来る。瓦礫はチューブのバリアにぶつかり、ゴム毬の様に跳ね飛ばされてゆく。賢はチューブの中を通り抜け、人々の居る場所に出た。漆黒の闇で誰の姿も捕らえることができない。しかし、沢山の意識がひしめき合っているのは分かる。賢は人々に語り掛けた。

「皆さん、救助に来ました。しっかりしてください」

賢は人々の存在を感じる空間の上方に蠟燭を顕現させ、それに火を灯し、それを坑道壁の窪みに立てた。人々の姿が浮き上がって見えた。皆坑道壁に背を凭れ掛けてしゃがみ込んでいた。賢は人々の数を認識した。10人の存在は確認できた。残りの4人は見当たらない。全員衰弱し切っているようだった。賢の姿を見ても声を発する元気さえも残っていないようだ。賢は一番近くにいる人に近づき、その手を取った。50歳前後の痩せた男だ。ゆっくり目を開けて虚ろな視線を賢に向けた。賢は菓子パンとコップ1杯の水を顕現させて男に持たせた。

「さあ、食べて元気を付けて」

その男性は一息吐くと、黙って水を一口飲んだ。それからパンにかぶり付きがつつと食べた。賢は次々に、男達の掌の上にパンと水の入った

コップを顕現させていった。5人まで与え終え、6人目の手を取ったとき何者かにいきなり、右手を捕まれものすごい力で坑内の奥に引っ張られて行った。賢は脚を踏ん張ったが抵抗も空しく岩肌に思い切り身体を叩きつけられた。

「何者だ！」

「お前は俺たちの計画の邪魔ばかりする。もうこれ以上邪魔立てさせない。お前の命もこれまでだ」

賢は周囲に一気に20本ほどの蠟燭を顕現させ、それらに一斉に火を灯した。急に坑内が明るくなった。そこに現れたのは、黒く透けたドレスを着て妖艶な雰囲気漂わせている女性だった。賢はその美しく官能的な姿に目を奪われた。暫くその姿に囚われていたが、ふと、女性がその姿に全く不釣り合いな大きな斧を手をしていることに気付いた。女性は賢の姿が眩しいのか、顔を背けるようにして言った。

「なぜわたしたちの邪魔ばかりする。ここにいる者達はわたしたちの意識に同調する者達ばかりだ。この者達の魂は、愛と歓びの世界に浸っている。この者達もわたし達と共に永遠に楽しむことを望んでいるのだ。もしお前がそれを妨げるのなら、黙って見過ごすわけにはいかない。この者達の為にもわたしは戦わなくてはならない。この者達の魂は、全てわたし達のものなのだ」

「お前は何者だ、この地震を起こしたのはお前か？」

「わたしではない。だが、この地震で多くの者の命が失われる。わたしは死にそうなものや、死んだ者の魂を救い出し、愛と歓びの世界に導くために、その魂を貰い受けることにしている。毎日が歓喜に満ちた理想的な世界を作るために、沢山の魂を呼び集めている。お前が意識改革などというくだらないことをしようとしているから、わたしたちもそれに見合った理想郷を作ることにした。殆どの人々は、お前の考えるような人の為に生きるとか、苦しんでいる人たちを救うなどという、戯言に翻弄されるようなことはない。毎日仕事などせずに私達のような美しい女性の身体を抱いて、歓びの中で生きていきたいのだ。私達女も同じだ。豪邸に住んでグルメな食事を食べ、美しい服を着て何不自由のない生活をし

たいのだ。いつも逞しい男の腕に抱かれて、まどろみの夢のような世界に生きていきたいのだ。そういう人たちに理想郷を与えるためにも、お前に勝手な真似をさせる訳にはいかないからな」

「残念だったな。ここの人たちは俺が全て救い出す。たとえ命を落としてしまった人があっても、お前達にこの人達の魂を渡すわけにはいかない。魂は永遠なのだ。お前の言うような安楽で歓喜に満ちた世界と苦渋忍耐の世界は表裏一体でその片方だけで成り立つような世界は存在しない。それは永遠の魂を持って生きる世界なのだ。お前はそんなことも分からないのか？」

「わっはっはっはっは、馬鹿者、お前はいつからそんなお人好しになったのだ。永遠の魂なんてものはありゃしない。今、この世界では、苦しみの無い喜びの中にだけ生きることができるのだ。それこそが理想の世界だ。よく見ていろ、わたしがその世界の有りさまを見せてやる。お前もそれが人間の生きる理想の世界だということが分かるだろう。人々の一人一人が自分自身のみの歓喜のために、安楽を求めて生きれば、世界全体が歓喜に満ちて、苦しみは消えて無くなる」

そう言うのと女の後方に何人かの男女の絡み合う世界が現れた。よく見るとそれは4組の男女だった。女の言う通り、4組のカップルは互いに求め合って歓喜に浸っている。賢はその光景が人間の欲望の意識が創り出した世界だと思った。賢は暫くの間その光景を見つめていた。一組の男女が暫く絡み合っていたが、女が歓喜の中に投げ出されている間に男の方は、相手から離れて横で絡み合っている女の髪に手を伸ばした。男は鼻筋がとおり、目の大きめな美形の顔立ちをしている。髪に触れられた女は、意識的にか自分の髪に触れた男の手を握ってにっこり笑った。その女と絡み合っていた男がそれに気付いた。その男はレスラーの様な筋肉隆々の肉体をしている。いきなりちょっかいを出した男の腕を握るとその男の腕を思い切りひねり上げた。腕はポキッと音を立てて折れた。美形の男は悲鳴を上げた。レスラーのような男はそれだけでは済ませなかった。大きな掌で美形の男の頭を掴むと、いきなり首をひねった。ポキッと音を立てて男の首が折れた。更にレスラー男は拳を振り上げ、女

の頬を思い切り殴った。女は悲鳴を上げ口から血を出して、その場に倒れた。しかし、いつの間にか手と首を折られた男は生き返り、また別の女の所に行き、その女に媚びを売っている。レスラーの様な男も倒れた女の髪を吊り上げて、その顔をめったやたらに殴り、倒れ込んだ女の上に馬乗りになって女を求めた。倒れた女は、いつの間にか意識が元に戻り、口から出ていた血も消えて男の背に両手を回した。賢は初めからそれが幻影であることを見抜いていた。

「お前の作ろうとしている世界は、残念ながら俺には通用しない。あの男達の姿を見てみろ、あれが理想の世界で為される行為なのか？欲望と歓喜の果てに激怒と煉獄が現れているのが分かるだろう。殺された男はもとのまま生きていよう。何事もなかったのが分かるか。お前は自分の好きなように、女性の姿を写し取り、その幻影を男達にあてがって、男達の欲望に満ちた心を弄んでいるだけだ。だが、男達の心は純粹ではない。だから欲望が満たされずに更なる歓喜を求めて彷徨う。その結果、相手に嫉妬と激怒の感情を起こさせ、そこに愛欲の地獄を創り出しているではないか。ここは幽界だ、あらゆるものが現象界より一層希薄なエレメントで出来ている。お前のように欲望に基づいて歓喜を求める捨れた意識では、本来の原型を写した理想的な物質化などは到底できない」

「そんなことはない。よく見ている」

そう言う女性、衣類を脱ぎ捨て、自ら先ほど殺されて生き返った男の所に向けて自分自身を投じた。男は直ぐに、女性の手を取り女性に絡みついた。2人は暫くの間求め合っていたが、やがて男が先ほどと同じように、横で絡み合っている別の女性の髪に手を伸ばした。髪に触れた女は男の美顔を見て微笑みを投げ掛けた。しかし、相手の男は気付かないようだった。身を投じた女はそれに気付いた。いきなり美形の男性から離れると斧を振り上げて、男の首をめがけて一気に振り下ろした。男の首は斧で切り落とされその場に転がった。女は大きな口を開けてその生首を飲み込んだ。しかし、首を切り落とされて倒れ込んだ男の首は直ぐに復元した。いや、よく見ると、初めから切り落とされてなどおらず、何も変化していないのだ。

「お前の力では、人の命を扱うことはできない。せいぜい、強制的に亡くなった人の魂を、意識の迷いの闇に引きずり込むことくらいしかできないはずだ。現実界が写像の世界だからと言って、それをお前の様な荒い波動の意識で変えることなど決してできはしない」

「何を言うか、意識を集中することで何でも意のままになることを、わたしが知らないとも思っているのか？安楽と歓喜に満ちた世界はお前も望んでいる世界ではないのか？」

「それは、意識が純粋な場合だ。さもなければお前の様に濁った心を持って行った行為の結果が、お前自身を雁字搦めにする。お前が、人の魂を弄べば、お前の魂も迷妄の世界で翻弄される。今の光景を見て分かるだろう。安楽、歓喜だけの世界は無い。それを求めれば、必ずその反対のものが顕現してくる。永遠の安楽と歓喜は自己を捨て、何物も求めない状態が達成できて初めて得られる境地だ。いつまでも同じ過ちを繰り返すでない！」

その時、辺りに展開していた男女の絡みの世界が消え、一人の老人の姿が現れた。

「はっはっはっはっはっは・・・賢、愛欲の世界をよく見極めたな。これが今日のレッスンだ。お前には大抵のことが見えているようだ。今日はおまえの中に残っている異性への執着心を試してみた。まだ、心が動くようだが、心を動かなくさせることより、動く心を客観視することが重要だ。よく覚えておきなさい」

「ムクウさんだったのですね。どうりでおかしいと思いました。ありがとうございました・・・ところで、この状況はムクウさんが創り出した状況なのですか？」

「いいや、違う」

「それなら、どうして、こんな緊急事態の中に出てこられたのですか？僕に対して教育して頂くより、この人たちを救うことの方が先決だと思うのですが・・・」

「おまえがそう捉えればそれでいいが、あの6番目から8番目の男は、あのときお前が水とパンを与えたら死んでいただろう。少し、時間が必

要だったんだ。今も危険であることに変わりはない。前の5人と最後の2人はおまえの与えたパンと水で生き返るだろう。先ず、最後の2人にパンと水を与えなさい。それから、残りの3人には白湯を少しだけ与えて、それから意識が戻ってきたら少しずつ食料を与えなさい。あの3人は、地震の起きた時には何も食べていなく空腹だったはずだ。消耗が激しすぎる者達だ。残りの4人も同じように体力を消耗して、既に死んでしまっている。気が付かなかったかも知れないが、4人の遺体は10人の居る壁の右側の岩の影に運ばれている。10人が運んだようだ。ワシがおまえに見せた幽界の光景は、亡くなった者達が引きずり込まれている意識の世界の模様だ。それを複写しておまえに見せた。ワシは、直接おまえ達地球人の創り出した幽界に入ることは許されていない。外側から客観視するだけしか認められていない。だから、それを模写し、シミュレートしておまえに見せたのだ。洞窟の奥でおまえが入り込んだと思っている幽界はワシの作った空間だ」

「あの入口付近で見た動物たちもムクウさんの創り出した複写だったのですか？」

「いや、あれは、地球の幽界に創られた世界だ。それから洞窟の奥に立ち上がった障壁も地球幽界のものだ。だから、これから、あの障壁を創り出した者の意識に立ち向かわなくてはならなくなるだろう。今日の講義はここまでだ。残された問題は自分で解決しなさい」

「分かりました」

賢がそう答えると、ムクウの姿は既に見えなくなっていた。賢は直ぐに10人の男達の周囲にバリアを張った。案の定、上方から岩が落ちてきてバリアのドームの上部から洞窟の左奥に滑り落ちた。賢は急いで2人にパンと水を与え、残りの3人に白湯を少量与えた。賢は一人ずつ外に連れ出すことにした。ドームを通ってのテレポーテーションで最初に危険な状態にある男性3人を、順次洞窟の外の動物たちから離れた場所に運び出した。そこから現象界に移動して、梓の脇にその者達を連れて行った。一人目が現れると、周囲に集まっていた観衆からどよめきがあった。それはそのはずである。まだ坑道は塞がったままなのだ。賢はその

男を地上に横たえろと梓に言った。

「この方達3人は危険な状態にある。今、白湯を少し飲ませたが、これから、重湯のような流動食を少しずつ与えないとまずい。直ぐに救急車で病院に運び込んでもらってこないか？」

「あなた、分かりました」

梓は横の方にいた2人の男性に手を挙げて合図を送った。救援隊の男性だった。直ぐに担架が運び込まれて、3人が運び出されて行った。「救出の目途は立ったぞ。洞窟内に残っている7人は助かりそうだ。今の3人は危険な状態にあるが、的確な処置をすれば助かるだろう。残念ながら4人は亡くなってしまった。梓、この方から亡くなってしまった人たちの情報を訊いて、OVSで意識にコンタクトしてみてもらえないか？さっきも言ったけど、危険だと感じたら直ぐに中止しろよな」

賢は直ぐに幽界に戻り坑内に入って行った。7人の内の最初の男性から助け出すことにした。

「みなさん、あなた方は助かります。これから、一人ずつ外にお連れしますので、僕に言われた方は、少しの間、僕にしっかりしがみついでください」

「俺たちは、どうなるんだ？」

「はい、助かります。大丈夫ですから、心穏やかにしててください。もう暫くすれば外に出られますから」

賢は一人ずつ運び出していった。既に梓の周囲には黒山の人だかりが出来ていて、一人運び出される度に歓声が上がり、拍手がわき起こった。被災者の家族が来ているようで、4人目の男が現れると、妻と子供達が駆け寄って来て泣き伏した。5人目から8人目まで同じように推移した。9人目を連れ出そうとしたとき、最後の一人が震える声で言った。

「僕を置いて行かないでください！僕も一緒に連れて行ってください。恐ろしくて死にそうです！」

「直ぐに戻りますから辛抱してください。2、3分で戻って来ますから、目を瞑って、今までの人生で一番楽しかったときのことを思い浮かべて、一番好きな歌を唄ってください。直ぐに戻って来ます」

賢が9番目の男を外に連れ出したが、そこには家族の姿は無かった。前に救出された男達が、家族と歓びを分かち合っている間、男は周囲を探しているようだった。一人の男性がその男の所にやって来た。

「見淵さん、助かってよかった・・・」

「ああ、篠村さん、女房はどこでしょうか？娘は？」

「まあ、あちらに行って休みましょう。まず、体力を付けなくちゃ」

「ねえ、女房はどこに居るんですか？」

「・・・残念です・・・お宅の筆筒が倒れてきて・・・」

男性は泣き崩れた。賢は、残して来た男が心配になり、直ぐに坑内に戻った。やはり心配は的中した。男は半狂乱状態に陥っていた。蠟燭の光がゆらゆら揺れていて、バリアの外に青い光を発する、異様な生き物が蠢いていた。

「うわー、うわー、助けてくれー！やだー、おれはやだー！」

男は辺りを駆け回っていた。賢は逃げ回る男を捕まえて、思い切り頬を平手打ちした。男はその場に倒れた。賢はその男を抱きかかえて、チューブの中を空中浮揚した。出口まで来たとき、動物たちが一斉に騒ぎ出した。賢はチューブから抜け出すと、思い切りスピードを上げてできる限り遠方まで飛行し、ゆっくり現象界に戻った。賢の現れたのは人垣の後方だった。賢は水の入ったコップを物質化し、それを男に飲ませた。目を覚ますと男は悲鳴を上げた。群衆が寄って来た。賢は救援隊を呼んで欲しいと頼み、駆け付けた救援隊にその男を引き渡した。それから群衆を掻き分けて梓の元に戻った。

「梓、コンタクトできたか？」

「はい、さっきまでできていましたが、また繋がらなくなってしまいました」

「どんな感じだった？」

「何かに囚われているようで、こちらに意識を向けません。何かに浸って恍惚としているようです。時々激しい感情の嵐が襲ってくるようですけど」

「やはり、そうか。梓、俺は幽界の死後の世界に入ってゆくから、俺が

戻れなくなったときは、さっき言ったようにして俺を呼び戻してくれ」

「分かりました。でも、くれぐれも気を付けてくださいね」

賢はそのまま姿を消した。周りにいた見物人達は、ただ呆然として見守っていた。

賢が4人の男達の意識を追って行くと、そこに先ほどの斧を手にしていて女性が現れた。今度は、斧は持つておらず、黒い喪服を身に着けている。女性が言った。

「何しに来たのですか？あなたはあの悪名高い内観賢でしょう？」

「どうして、俺の名前を知っているんだ？」

「幽界じゃあ、有名ですよ。あなたが邪魔するから、幽界がだんだん小さくなってきていて、そこに住んでいる人たちが住む場所を失って苦しんでいるんですよ。今度は何をしようというのですか？」

「人は永遠の生命を持っているんだ。君たちの行っていることは人々の永遠の大道に立ち現れて、道を惑わせる行為だよ」

「あなたは、平安と歓びに満ちた世界が理想の世界だと言っていますね。わたしは、亡くなった方々にそれを実際に実行して差し上げているのですよ。この先に私達の住んでいる館があります。ご案内しましょう。あなたもそこをご覧になれば、その世界が如何に素晴らしいか分かります」

「坑道の奥で亡くなった4人の方々もいるのか？」

「はい、いらっしゃいますよ。どうぞこちらにお越しください」

賢は喪服の女性の後に従って附いて行った。女性は12階建の大きな建物に賢を案内した。そこはフロリダにあるハリアットホテルを思わせるような建物だった。中に入るとまるで高級ホテルのロビーのようになっていた。ホテルと違う点と云えば、そこにいる人たちが皆喪服を着ていることだった。賢は建物内にあるレストランに案内された。大きなレストランである。扉を開けて中に入ると賢は目の当たりにする光景にあっけにとられた。円形のテーブルの上に、様々なご馳走が山のように出されていて、絢爛豪華に着飾った者達がわいわい騒ぎながら美食を食っている。賢の入って来たのに気付く者は誰もいなかった。賢も一つのテーブ

ルに案内されたが食事は断った。喪服の女性は頷くと、賢を伴いレストランを出てエレベータに乗って上階に移った。それが何階だったか分からないが、エレベータから降りると、賢は一つの部屋に案内された。そこは浴場のようになっていて脱衣所があった。脱衣籠の中に先ほどレストランで見たような煌びやかな衣類きらが脱ぎ入れられていた。賢はそこがまるで銭湯の様な場所に思えてきた。しかし、扉を開けると、銭湯ではなかった。先ほどムクウに見せられた通り、男女が痴態をさらけ出して、絡み合っていた。

「賢さん、貴方もお好きでしょう。わたしがお相手いたしますから、中にお入りになりませんか？」

賢は自分を含む光景を俯瞰しながら訪ねた。

「坑で亡くなった4人の方々はどこにいるのですか？」

女性はさっと喪服を脱いで、それを脱衣籠に入ると。美しい姿態を隠す様子もなく、賢の方に身体を寄せて言った。

「まずは着ている衣類をお脱ぎになってね。中にお入りになったら、ご案内しますわ」

賢は、女性の身体に惹き付けられないように意識して言った。

「僕はここに居ますから、4人の方を呼んで来て頂けませんか？」

「まだ、そのようなことをおっしゃっているのですか？」

そう言いながら、女性は右手の指をくわえて呼び子を鳴らした。どこからともなく5人の裸の女性達が集まって来て、賢の服を脱がそうとした。賢は意識で身体を中空に浮かせた。女性達は恐れおののいて賢から遠ざかった。賢は最初の女性に向かって言った。

「早く4人をここに連れて来てください」

そう言うと、賢は中空に浮いたまま瞑目し、自分の身体にプラナーの注入を行った。そして掌を翳し百会から流入するプラナーを掌の労宮から放出した。裸の女性達は目を覆うようにしてその場から逃げ出した。賢を案内してきた女性も目を伏せるようにして、その場にしゃがみ込んでしまった。賢は掌を部屋全体に向けた。輝く光が労宮から放出されて、辺り一面に広がった。そこにいた大勢の裸の男女が悶え苦しむようにし

て、その場にふさぎ込んでしまった。その中に呆然と佇んでいる6人の男性の姿があった。彼らは一体何が起こったのかとうろたえ始めた。賢は光を照射しながら、その6人に向かって言った。

「あなた方は、もう亡くなっているのです。ここはあなた方の進路を脇道に逸らせる、トリックの仕組んである場所です。このままこの状態に浸っていると、その後で大いなる苦しみに襲われます。早く脱衣室に戻って衣類を身に付けてください」

5人の男性と一人の女性がそろりそろりとその場を離れ、脱衣室に戻ってきた。

「さあ、早く、衣類を身に着けてください」

6人は自分たちの行っていたことを覚えていないようだった。賢は6人に向かって言った。

「あなた方は、どこから来たのですか？」

「坑内で落盤に遭ったんだけど、その後のことはよく分からない」

3人が寄り集まっていて、その中のひとりの男性が言った。賢は3人に、「あと一人はどこにいるのですか？」と聞いた。3人は口ぐちに「分からない」と応えた。残りの内、一人の男性と一人の女性は東海地震で亡くなった富士市と静岡市の者達だった。賢は服を着た5人に対し、

「最も親しかった人たちに心を向けて瞑目してください」

と言った。5人が瞑目すると、そこに2人の男性と一人の女性が現れた。霊界への案内人のようである。賢は5人に瞑目を解き案内人に附いてゆくように言った。5人は帰霊できた。6人の内の一人は賢を怖れ、元の仲間の中に逃げ戻ってしまった。その場にはまだ沢山の魂が迷っているのが分かる。およそ100人は居るようだった。どうやら、このビルの各階にこのような場所が設けられているようだと賢は覚った。ビル自体が暗い想念で固まって出来た建物のようなだったので、その場に居ると、次第に身体に重圧を感じ始めた。今そこの人たち全てを救い出すことは難しいと感じた。賢は一旦、現象界に戻ることに決めた。賢はエレベータに戻ろうとしたが、脱衣所への入口の扉がロックされていた。賢はそこから一気に外にテレポーションしようとした。その時何かが賢の

脚にしがみ附いた。先ほどの喪服の女性だった。賢は一旦意識を脱衣所に戻して女性に言った。

「どうして僕にしがみつくのですか？」

「あの人達はどこに行ったの？どこかから現れた人たちは一体誰？」

「みんな行くべき所に案内されて帰って行きました。突然現れた3人は亡くなった人たちを霊界に案内する魂達です。あなたも元の世界に帰られてはいかがですか？」

「私は使われている身です。自分の自由にはできません。大勢の人を喜びの世界に導く役なのです」

「それは、あなた次第ですよ。あなたが自分自身の意識で生き始めれば、誰も手を出したり、指図したりすることはできません。さあ勇気を振り絞って、自由な世界に飛び出してください」

「私を助けてくれますか？」

「大丈夫、何も心配することはありませんよ。ただ自分を生かしてください。大いなる存在に、自分自身を委ねるのです。僕があなたを導く天使を呼んで差し上げます」

「内観賢さん、一緒に附いて来てください。お願いだから。ボスはとても厳しい人ですから、私が抜け出すことは許してくれないと思います。でも、貴方の強い光があればボスも近づけないと思います。お願いです。私を連れ出してください」

賢は足にしがみついている女性の手を取って立ち上がらせると、衣類を身に着けさせ、目を瞑って天使の迎えを祈るように言った。やがて一人の美しい天女が更衣所の天井に張り付く様に現れ、そのまま空中に留まった。賢はその姿が方便であることを分かっていたが、喪服の女性の目にはとても神々しい姿に映った。天女が女性を手招きしたとき、一人の熊のような顔をした大男が更衣室に入って来た。男は大声で怒鳴った。

「おい、おまえ、内観賢だな、この女をどうするつもりだ！」

口が大きく鋭い目つきで顔はそら恐ろしいが、賢には近寄れずに更衣室の入り口で大きな声でがなっている。賢は男に向かって言った。

「このひとは、ここの生活から足を洗って、天国に行くことに決めたの

だ。もう、この人にかまうのはやめろ！」

「おまえのやっていることが正当だと分かったら許してやろう。しかし、もし、不当だと判断したら、おまえにもここに留まってもらうことになるがそれでもいいか？」

「もちろんだ。俺は自分の行為が正しいという確信を持っている」

「よし、いいな。じゃ、先ずおまえの考えをはっきりさせよう。おまえはなぜ、俺たちの邪魔をするのだ」

「みんなのことが好きだからだ。おまえのこともとても気になる。こんな所にいつまでも居ないで、広大無辺な世界に戻らないか？おまえ達が望まないその世界は、ここの何百倍、何千倍も至福に満ちている。一時的な快樂を超えて、至福に満たされている」

「おまえも知っているだろう、男と女が一体になったときの至福の感覚がほかの何物にも代え難いほど、素晴らしいことを・・・だから、俺たちはここに來た者たちに、生前味わうことのできなかつた本当の快樂を味わわせてやっているのだ」

「おまえは、彼らとその快感だけで充足できると思っているのか？愛が根付いていなければそんな快樂など、ほとんど取るに足らない。だから、すぐに飽きてしまい、更なる快樂を求めて逡巡するのだ。もともと男女の結合の時の快樂はほんのきっかけに過ぎない。ふたりの間に愛があって初めて、そのきっかけで睦み合う男女は完全な一体に導かれるのだ。その時に導かれる至福の状態は、言葉では表すことができない、自分が溶けて無くなるような境地だ。全ての人間は死後、それと同じ境地を約束されているのだ。死んだ後、執着心や偏執な意識、邪悪な意識さえ持っていなければ、自然に導かれる永遠の至福の世界だ」

「それはおまえの詭弁だ。おまえは、沢山の女性と関係を持ってきたではないか。そんなに多くの女に対して、同じように愛を保てるわけがないだろう。おまえの相手になった女達がどれだけ葛藤を味わっているか知っているのか？彼女達の苦しんでいる心が俺の処に強い波動となって届いているのだ。俺達はそういう波動を手懸かりに、死んで彷徨っている奴らを安樂な道に導いてやっているのだ。俺のような慈善家はそうは

いないぞ」

「俺はおまえの言うとおりの沢山の人たちを愛している。だが、その愛に一切の条件付けは無いし、勿論強弱もない。確かに俺とふたりだけで生きたいと思っていた女性は何人かいた。しかし、それも彼女たちの意識の問題だ。もう、次の段階に進まなくてはならない時期にきている。普遍の愛の段階にな。おまえのやっている行為は、愛ではなく欲望を満足させること、つまり快樂だけを目指している行為だ。愛が無いと同じ女性と睦み合う場合でも、本来の自己につながる道は閉ざされてしまう。それは亡くなった人々から意識を奪い、感覚の世界に引きずり込む行為だ。結果的にその人達は味わった快樂に相当する分の苦しみを味わうことになってしまう」

「おまえには、それができるのか？」

「おれは、愛することでしか女性と睦み合うことができない」

そのとき、賢は自分を呼んでいる意識に気付いた。梓だった。

「おれはもう、現象界に戻らなくてはならない。おまえは、まだここで生きてゆくつもりなのか？」

「おれは、もう死んでいる。あのつらかった現世に戻りたくはない。もう暫くはここで、人々を……」

「そうか、それでは少なくとも、この人だけは解放してやってくれ。この人の意志は天国に向いている。おまえとは、また会えるかどうか分からないが、おまえはおまえの意図するとおりの存在になるということだけは覚えておけよ」

賢は天女に向かって頷いた。天女が大きく手を振ると、女性のからだが生きて浮き上がった。天女は賢に頭を下げると、そのまま女性の手を取り天井の中に消えた。

「おまえも天国に帰れよ。じゃあ、俺は現象界に戻る」

熊からパンダの様に変わっている男の顔を横目で見ながら、賢は梓に向けて意識を集中した。

賢は梓のすぐ横に現れた。梓は近くにある榎木に自分の身体を縛り付けていた。賢はその紐を解きながら言った。

「梓、ありがとう。どのくらいの時間が経過した？」

「もう、夜が明けます。このまま戻って来られなくなったら大変と思って、思い切ってあなたを呼んでみました」

「ありがとう。君が呼んでくれたおかげで、幽界から身を引くことが出来た。幽界には無数の人達が居て、自分の心の歪みに気付かずにいる。また、時期が来たら彼らと話そうと思う」

「幽界というのは、地獄のことですか？」

「地獄とか、天国という場所はないよ。外から見ると調和を欠いた意識の場があるだけだ。幽界は人間の意識が作り上げた、実態の無い領域だ。さっきまで俺の居た幽界の場は、快樂の中に浸っている者達のひしめき合った場だった。無数の人たちがそこに縛り付けられている。そこから解放させるのは、あらゆる幽界の中で一番難しかも知れない。そこに居るのが心地よいと思っている者達にとって、そこは離れがたい場だからだ。その者達にとってはそこは天国だろう。だが、俺が見ると地獄に見える。気を抜くと引きずり込まれてしまうかも知れない場だ」

由仁

賢は梓を連れて札幌の家にテレポーテーションした。梓は賢に抱かれて眠ってしまっていた。賢は自分の寝室に現れると眠っている梓をベッドに横たえた。梓は気付かずに深く寝入っていた。賢は一旦山梨に戻り、OVSを抱えて再び家に戻り、一息吐いてシャワーを浴びた。蓄積していた疲れが一気に現れてきた。

誰かが自分を呼ぶ声で賢はっと気付いた。目を開けるとベッドの中にいた。しかし、自分がベッドに入った記憶はなかった。梓の姿は無かった。意識を覚まし起きあがった。居間に行くと梓がキッチンで食事の支度をしていた。

「あなた、目が覚めたのですか？」

「俺、シャワーを浴びた後の記憶がないんだが・・・」

「大変だったのよ。私、はっとして目が覚めたの。あなたがいないことに気付いて探したのよ。そしたら、洗面所の床の上に大の字になって寝入っていたの。裸だったのよ。身体が冷たくなっていたわ。パジャマを着せてベッドまで連れて来るの大変だったわよ。その後のことは覚えているでしょう？」

「いや、全然記憶がない」

「もう、知らない……」

食卓にはスパゲティとサラダ、コンソメスープが用意されていた。

「あなた、顔を洗って着替えていらして」

賢がテーブルに戻ると、コーヒーを用意して持って来た梓が、賢のそばに来て額に口づけした。

「おなかが空いたでしょう。さあ、いただきます」

「梓、今何時だ？」

「もう、2時過ぎよ」

「意識が切れたのは久しぶりだな。ここに帰ってからの俺はどんな風だったのかな？」

「あなた……本当に記憶無いの？」

「*****」

賢の脳裏に昨夜の記憶が蘇ってきた。シャワーを浴びた後、スツールに腰掛けようとして足を踏み外しその場に倒れ込んだ。気持ちがよくて、そのままそこで眠ることにした。身体が冷えてきた頃、梓がやってきた。梓は自分の裸の姿を見てすぐに駆け出して行き、暫くするとパジャマを手にして戻って来た。梓がタオルでまだ濡れている自分の身体を拭ってくれた。梓を抱き寄せた。梓はもがいて逃れ、幼児にするようにいちいち手や足を持ち上げて、自分にパジャマを着せた。身体を動かすのがおっくうだった。梓が四苦八苦してパジャマを着せている様子が分かる。梓は自分の身体を抱える様にして立ち上がらせた。自分はまるで酩酊しているようだった。梓の肩に身体を委ねるようにして寝室まで歩いて行った。梓がやっとのことで自分の身体をベッドに横たえた。梓は息を荒らげていた。自分はいきなり梓の手を取って、ベッドの上に引き上げた。

梓は抵抗しなかった。梓は身を寄せて来て、冷たい自分の胸に手を当てた。そのとき、梓をこの上ない存在として愛している自分がはっきり見えた。「梓、愛しているよ」

「梓、思い出したよ。ありがとう」

「あなた、お礼なんて言わないで・・・疲れは取れたの？」

「意識と肉体が遊離していたようだ。かなりエネルギーを使ったからね。自分では気が付かなかったけど、幽界で創造を繰り返したとき、相当エネルギーを消耗したんだな。意識と肉体の繋がりが切れそうになるほどだから・・・」

食事が済むと、梓がテレビを点けた。ニュースのチャンネルを探した。丁度東海地震の復興状況の説明をしているチャンネルがあった。

「・・・このような復興状況の中で、ひときわ際だっているのが、オーラ・ビジョン・システムを使った救助でしょう。どこからともなく現れ、救助活動を終えると、何処にか消えてしまうというのが不思議ですが、その救助方法は明らかにこれまでの常識では考えられない方法を用いていたようです。普通では助け出せないようなところからも、被災者を救出しています。彼らのこれまでの活動をまとめてみました。彼らは地震発生直後、先ず消火活動から始めたようです。これは大地震の時の対応の鉄則です。彼らはそのこともよく知っていたようです。通常の消火活動だけでなく、特殊なことも行いました。延焼を防ぐために透明な不燃材でできたバリアのような仕掛けを使ったようです。特に沼津のパチンコ店の延焼を防ぐ方法は、それを見ていた人によると戦慄を覚えるような光景だったようです・・・」

「あなた、どうやらあなた達の活動は知れ渡ってしまったようですね」

「そのうち、コンタクトを取ってくる人もあるだろうね。正負両面からのアプローチを覚悟しておく必要があるな」

「はい、昨日のこともありますし・・・」

1週間後には梓の退職も無事済み、その2週間後には家と牧場の土地も手に入れることができた。数馬も退職した。数馬はすぐに現在の内観シス

テムズに入社し、東京の本社に勤務が決まった。賢と原は数馬に先ず社長付きという形でそのポストを与えた。賢たちは5月の株主総会で数馬を社長にすることに決めていた。いよいよ新しい会社のスタートの準備が出来た。賢と原、そして数馬が加わって、物質転送機を製造販売する会社の設立の手続きを進めた。家の裏手に新会社の工場を建てることになった。冬で雪が残った中での作業になった。工場とは謂え建坪100坪の平屋建てで、さほど広くない建屋だったが、オフィス用品や製造に必要な設備を導入すると、一応会社の体裁が出来上がってきた。3月の中旬に新会社がスタートした。賢が社長となり、原は研究所長という位置付けになった。梓は賢の秘書室長という肩書きにしてもらった。しかし、このときは秘書室には梓しか存在しなかった。賢と原は5名の従業員を雇って、物質転送機の初ロットの製造に取り掛かった。

政府主導の復興支援体制が出来ていたので、東海地震の復興は急ピッチで進められた。時間の経過とともに賢たちの救助活動については、あまり取り上げられなくなってきた。賢はそれを幸いに思った。この間、賢は5回に渡って正体の分からない存在からの攻撃を受けた。しかし、賢は既にそれを躲す術を自然に身に付けてしまっていた。攻撃は大抵車の追跡か狙撃だった。車の追跡を受けたときは、いつも迂回する方法で逃れた。狙撃を受けるときはその直前に賢は必ず予兆を感知し、標的となることを避けることができた。幸いなことに梓に対する直接の攻撃は無かった。梓が危険を感じる時は、必ず賢が近くに居る時だった。賢は梓を危険に晒さないために、身の危険を察知したときは必ず一人で行動するようにした。家への直接的な攻撃は無かった。正体不明な存在が賢の家を認識していないということは考えられなかったが、康子と一緒にいるところを襲われたときに警察に通報したことで、この家が警察の警戒監視下に置かれ、犯人が警戒したようだ。その後も賢への攻撃が続いていたので、警察は賢の家周辺に対しては定時周回で監視を行っていた。

ルワンダ

祐子のフルマはその活動が充実してきて、今や国家の中でも重要な存在になっていた。やはり最重要な取引商品はコーヒーだった。鹿島のムーンボックスとの取引も完全にルート化し、品質も以前に増して安定してきた。祐子はフルマを国営の法人にする手続きを進めていた。フルマの運営に関する法律ができ、個人的に利益を得ようとする者の参入ができない構造になった。ただ、海外との取引については普通の企業と同様な取引形態をとり、相手の会社や法人に不利にならないような配慮をしたため、世界各国の企業に好意的に受け入れられ、フルマはその勢力を著しく拡大していった。ルワンダでは経済的な理由で民族間の衝突が起きる危険性は極めて低くなった。残るは周辺国の影響に対する防衛策と、トラウマや後遺症の自然治癒を待つだけだった。祐子は長老達の協力を得て、食糧自給市場、文化交流センター、職業訓練センターなどのいくつかの組合組織を作っていた。それは部族間を超えた交流の場を与えるものでもあった。3月になるとそれらの組合組織の活動も活発になってきた。亜希子は祐子の補佐役をするようになっていた。祐子は亜希子の単独行動を許さなかった。亜希子は祐子と一緒に働くことができるようになると、これまでのような不安定な精神状態に陥ることが無くなった。しかしふたりの女性にとって一つの大きな懸念は東領製作所との関係だった。東領製作所は香川によるフルマとの取引の推進が功を奏し、希土類の安定確保ができるようになった。フルマはレアメタルの採掘にも成功し、資金力と政府の援助を得て鉱山を購入し、新たにレアメタル専用の精錬所も建設して、東領製作所やその他数社との長期的な取引が成立していった。実際にはこれまで鉱山が採掘していたタングステンなどの鉱物の輸出から手始めに輸出を開始していた。まだ具体的なレアメタルの輸出までには至らなかったが、包括契約の金額は膨大だった。東領製作所との取引が頻繁に行われるようになると、祐子と亜希子は自分たちの存在を隠しておくことが難しいと感じるようになってきた。フルマは東領製作所との取引では、香川以外の人間との交流を一切拒否していたので、東領製作所の資材調達本部に不満を抱かせているようだったが、社内の疑念を払拭するために香川が精一杯立ちまわっていた。

祐子は首長の座をサスカブに譲り渡すことにした。祐子は3月の末に一人の男児を出産した。スバハという名前を付けた。1週間後、スバハ誕生の祝賀会が催された。フルマだけでなく、両部族の関係者、国の主要人物まで参加した盛大な祝賀の儀式が催された。出席者は2000人を超えた。祐子はそこで、出席者全員に感謝と祝福の言葉を伝えた。出席者はそれぞれ神格化されたMAMA・YUKOの言葉に涙した。その場で祐子は「自分は首長の座を降りサスカブにその座を譲り渡すのでこれからはサスカブの下に愛と平和の種族を維持してゆく様に」と伝えた。祝賀会が終わってから、サスカブは譲り受けた首長の座はいずれ祐子の寵児ちようじが引き継ぐべきだと主張したが、祐子はそのことは認めなかった。ただ、スバハが成人しそれなりの能力を得てきたら、そのときはスバハに対してもほかの人達と対等に扱うことと、互選で次の首長を決めることをサスカブと長老達に伝えた。長老達は皆同意した。祐子と亜希子は口には出さなかったが、ルワンダを出る時期が迫ってきていることを感じていた。

由仁

4月になり原と愛子が札幌の家に引っ越して来た。愛子は鳳凰高校への進学を断念し、北海道の札幌秀峰高校に進学することになった。愛子は雲井小夜子に気を遣い、わざわざ雲井から絹原に宛てた推薦状をもらった上で、正式に札幌バレエスクールに入学することになった。

「賢パパ、いよいよ明日ね。入学式って何をするのかしら？お話を聞くだけなのかな？」

「式自体はそうだけどね、その後でクラス分けやオリエンテーションがあるんじゃないかな。この前身上調査書を提出しただろう、あれと中学校からの成績表に基づいてクラス分けされているんじゃないかな。愛子は大丈夫だよ。それに高校は中学と違って、愛子もほかの生徒も同じ条件だからやりがいがあるだろう」

「ふうーん、そうなんだ」

「愛子さん、入学式には賢さんと私も出席するから安心していいわよ」

「うん、賢パパ、梓さん、よろしく・・・だけど、あまり目立たないでね・・・恥ずかしいから」

「大丈夫だよ。愛子のことを大きい声で呼んだりしないよ。まあ手は振るかも知れないけどね」

「だめ、それも駄目だからね。たのむから静かにしていて」

「はっはっはっは、冗談だよ」

愛子には梓の趣味の部屋と脱衣所との間にある客間が宛がわれた。原は愛子の部屋と廊下を隔てた向かい側の客間を居室にすることになった。原はすぐにアパートを探すと言ったが、賢が暫く同居するように説得した。原も特にこだわることもなく賢の提案を受け入れた。賢と原、そして梓が同居することで、新会社の組織化と運営方針の取り決めなどが非常にスムーズに進んだ。また愛子が加わったことで、内観家は一気に賑やかになった。

愛子の入学式には賢と梓が付き添って出掛けた。原も行きたがったが、愛子が

「原さんは、お留守番！」

と言ったので、原はがっかりしたようだった。

愛子は眼鏡を掛けずに入学式に臨んだ。ムクウの教えてくれた肉体組織の蘇生按摩で視力が飛躍的に回復したのだった。眼鏡を外しても問題なさそうなので、愛子は「人生が2倍楽しくなったみたい」などと言って大はしゃぎだった。賢と梓の目には、愛子が他の生徒に比べずっと大人に映った。少し背が低いように思われたが、雰囲気は他の生徒よりずっと落ち着いていた。その晩は4人で愛子の祝賀パーティを行った。パーティで愛子は一人でベゼルを踊った。その妖精のような軽やかな動きに3人は見とれてしまった。原は時々ため息をついていた。

愛子はレッスンのない日には、夕食後に居間でバレエの練習を行うようになった。原も参加してスーフィーダンスを行うこともあった。4月の末には物質転送機の初ロット10台が完成した。賢は原と相談して、C

B Aテレビに物質転送機の紹介番組を組む気は無いか打診してみることにした。C B Aの担当者は、東海地震の直後に賢と梓が理解しがたい方法で被災地への物資供給の支援をしていたことに気付いていた。担当者は即答することは控えたが、電話を切った後すぐ折り返し電話が掛かってきて、10日後のバラエティ番組の中で紹介したいと言った。賢と原はその反響の大きさを予見していた。電話の応対や、メールでの問い合わせへの受け応え方法などを予め決めておくことにした。問い合わせが売りに繋がるものばかりでないことは予測できた。原は購入についての問い合わせを中央に据え、インフラなどの要請を上限、業務妨害の告訴などを下限と見なした正規分布を念頭に置くように賢に助言した。賢は梓に頼み、すぐに光電話回線を2本契約してもらった。1本はFAX用、もう1本は家の電話用にし、現在使用している回線を問い合わせの受付専用にすることにした。その回線は自動応答専用とし、ダイヤルキーで番号を入力することにより録音された内容を回答する方式にした。メールも2つのアカウントを増やした。新たに設けたアカウントを問い合わせ専用にし、メールが着信すると自動応答用のメッセージが返送される仕組みをサーバーに組み込んだ。機密情報の漏洩には細心の注意を払うことにした。それは原が予め用意していた仕組みを用いた。このマシンが世界の秩序を破壊することがないように、模倣を不可能にする仕組みをマシンの内部に組み込んである。それでもリバース・エンジニアリングの強者の挑戦を受けることは目に見えていたので、どうしても漏洩する危険性が出てきたら、マシンそのものが自己破壊モードに入るようにあらゆる箇所にトリガー・ポイントを設けた。

「原さん、このマシンには使い方によって犯罪に使われる危険性を感じますが、最初の段階から販売という形を取っても問題ないですかね？」

「品物の移動にだけ限定すれば、特に問題は無いと思いますけど、このマシンがどんな人間の手に渡るか分かりませんから、それだけが懸念材料です。現在組み込んである転送制限機能は距離の上限値と生命反応のある存在の転送拒否機能です。これだけではまだ十分ではありません。現在、転送先の状況確認機能を研究中です。もしかすると安全性という

点でその機能は必須かも知れません」

「原さん、その機能には実現の目処が立っているのですか？」

「ええ、もう少しです。これは、転送しようとする場所の時空間情報を入手して、そこに空気以外の物質が無いことを確認する機能です。それと、高い空間位置への転送を無くすため、物質到達地点の床面からの高さ、床部分の平面度、傾斜度などの情報を把握し安全性の確認をおこなう機能も研究中です」

「いっそのこと、転送物質を受ける台を用意して、それもセットで販売したらどうか？その受け台に、位置情報発信装置を組み込んでおいて、受け台と本体が事前に情報交換するようにしたらどうだろう。両方の装置が解読不可能なプロトコル（通信手順）でコミュニケーションすること、その通信が確立して初めて物質転送が可能になるようにすること、それでかなりのところまで悪用が防げると思うけど。解読不可能な通信が組み込まれたら、物質転送機の解読はほとんど不可能になると思うし、装置そのものも現在の人々の既存概念で捉えやすくなると思うね。そうすれば、どんな物でもどこでも任意の場所に自由に転送することができるという仕様から生まれる、様々な危険性を最小限に押さえることができるだろうし。それに必ず受け台を使わなくてはならないようにした方が、この世界でのリアリティが増すように思うね」

原は感心した。

「思いつきませんでした。賢さんはやはり鋭いですね」

原は同意した。しかし、その受け台の開発と物質転送機本体の改造にあと2ヶ月欲しいと言った。賢は合意した。

CBAでのデモンストレーションには受け台の製品化が間に合わないため、簡単な構造の台を2式用意することにした。それは家具製造業者に特注で作らせた木台の中に位置情報発信端末を埋め込んだだけの簡単な物だった。

いよいよ放送の当日になった。既に物質転送機と2つの受け台を放送局に送り付けてある。連休が開けた放送録画の当日、賢と原そして梓の3人は東京に出向いた。放送局に着いたのは午前11時過ぎだった。案内

されたのは大きなスタジオだった。電話で話した担当者の小清水ほか15人が賢たち3人の到着を待っていた。OVSの時とは違い、この物質転送機に対して、放送局がかなり期待している様子が見て取れた。バラエティ番組であるにもかかわらず、技術関連の専門家などを5人呼んでいるとのことだった。それは国立量子力学研究所所長、複素関数学教授、国立遺伝子工学研究所副所長、国立ロジスティック研究所専務理事、国土交通省政務次官、それに国際的なマジシャンを加えたそうそうたるメンバーだった。賢は小清水に聞いた。

「どうして、このような立派な方々をお呼びになったんですか？」

「内観さん、CBAはあなた達の行ってきたことについて殆ど知っています。もし内観さんの方から申し出がなければ、こちらから願ひする予定でした。この物質転送機がどの程度のものなのか、我々には想像もできませんが、しかし、もしこれが本物だったら現代の科学はその根底から見直しを迫られることになるでしょう。前回発表されたオーラ・ビジョン・システムも驚異的なマシンですが、今回は別の意味で皆真剣に受けとめています。今日お見えの先生方は日本でも権威であられる方々です。その方々に今日ご紹介頂くマシンの真偽のほどを判断して頂こうと思っているのです。ご了解頂けますね」

「勿論です。でも、一つだけお願いがあります。我々の名前を公開しないことと、顔にはマスクングを施してほしいのです」

「内観さん、それはもう意味がないんじゃないやありませんか？あなた方のことは、多くの人たちが知っています。ご存じないかも知れませんが、貴方のことを信奉する宗教団体のような集団も出来ているんですよ。逆にあなた方の行為に対する非難も山のように寄せられています」

「えっ？それは本当ですか。それは困ったな・・・分かりました。それでは、僕については顔を出すことを受け入れますが、ここのふたりについてだけは、是非匿名とマスクングをお願いいたします」

「少し待ってください。上司と相談してみます」

そう言うのと小清水は待機しているスタッフの方に行き、年配の男性と話をしていたがやがて戻って来ると、賢の申し出を受け入れると言った。

スタッフも皆真剣な表情でいる。賢たち3人の前に梱包された物質転送機と2つの台が運ばれて来た。小清水が言った。

「内観さん、マシンの用意をして頂けますか？電源は100ボルトでいいですか？」

「100ボルトで結構です。本体と転送台、物質受け台の3ラインお願いします。デモはここで行うことになりますか？」

「ええ、ここはスタジオですから、その中央の広い場所にマシンを置いて、説明とデモを行ってください」

原が小清水の許可を得て、物質転送域を囲う円形領域を示すために、床に札幌から持参したビニールテープを貼り、その中央に転送台を置いた。

「ゲストの方々に入室してもらってもいいですか？」

ゲストとは先ほどのお偉方のことだった。賢が了解すると、背広を着込んだ5人の男達と金色の刺繍の施してある黒いガウンのような衣装を身につけた有名なマジシャン、ミスターTQが入室して来た。銘々、慇懃な雰囲気を漂わせていて、賢たちの方をうさんくさいものでも見るような目つきでちらりと見て、奥に設けられているパネルディスカッション用のネームプレートの置いてある席に着いた。小清水が実際に放送されるときはファックス10台とオペレータの附いた電話機10台を用意して、リアルタイムで視聴者からの意見を受け入れる予定だと言った。小清水は先ずテストをしてほしいと賢に言った。賢が原と梓の方を窺うとふたりは相槌を打った。原は転送台をテープで囲ったサークルの中心に置き、電源を入れてから物質転送機本体の電源をONした。原は物質転送機の操作をしながら賢に向かって言った。

「賢さん、どこに送りましょうか？」

「そうですね、ミスターQTの前に現れるようにしましょうか？」

賢がそう言いながら小清水の方を見ると、小清水は指で丸を作って軽く頷いた。賢は物質受け台をミスターQTの席のテーブルの上に持って行き、電源コードを用意されたコンセントに繋いで受け台の電源を入れてから原に合図をした。原は頷いた。梓が持参したパンダのぬいぐるみを転送台まで持って行って置いて戻って来た。賢が言った。

「ミスターQ Tさん、申し訳ありませんが少しの間その受け台の上に手などを出さないでください」

そう言うと賢は原の方を見て準備が出来たことを確認してから言った。

「じゃあ、始めます。皆さん、ごらんになっていてください。今サークルの中にあるパンダのぬいぐるみをミスターQ Tさんの前に転送します。では転送スタート」

賢がそう言うと、ぬいぐるみが消え、すぐにミスターQ Tの前の受け台の上に現れた。それまで小さな話し声がしていたスタジオが水を打ったように静まり返った。

「OKですよ。録画しても大丈夫だと思いますが・・・」

賢が言うと、ミスターQ Tが言った。

「その、この台を触ってみてもいいですか？これに仕掛けがあるんでしょう」

賢が応えた。

「ええ、いいですけど、これは物質転送機とセットになっていますから、その台だけ調べても、何も分からないと思いますよ。その台を使って、ものを送る場所を決めているんです。そうしないとどこに送ったらいいのかわからないでしょう」

ミスターQ Tは、2、3度軽く頷いてから、手で台を持ち上げてあちこち見ていたが、特に仕掛けがないことを知ってそれをそのままテーブルに戻した。小清水が言った。

「パネラーの皆さんや、スタッフの方々も何か質問があるかも知れませんが、録画が始まったら番組を壊してしまうような質問は控えて頂きたいと思います。もしそういう質問がありましたら、今の内にして頂けますか？」

国土交通省の政務次官が言った。

「これはまやかしではないのですね？ミスターQ Tも同じようなマジックを行っているでしょう。もし手品の類たくいなら、我々は退席させていただきます」

小清水が言った。

「内観さん、どうなんですか？」

「ミスターQ Tさん、小さなもので、貴方が絶対マジックで送ることの出来ないものを教えてください。それを送ってご覧に入れます」

ミスターQ Tは応えた。

「私は実際に転送できるものなどありませんよ。マジックですからね。まあ敢えて言えば、熱湯とか、たばこの煙とか、液体や気体でしょうかね。それが容器無しに送られたら脱帽ですね。マジックではかなり制限を付けないと扱えませんかからね」

賢が応えた。

「それは物質とは言えないかも知れませんが、送ることはできます。どなたかたばこをお吸いになる方・・・あっ、ここは禁煙ですか？」

「大丈夫ですよ。換気していますから、少しくらいなら問題ありませんよ」

小清水が言った。小清水はポケットからマイルド・セブンのケースを取り出し、たばこを一本取り出して口にくわえ、ライターで火を点けた。小清水はくわえていたたばこを賢に渡した。賢はそれを持って、サークルのところに行き、たばこをくわえて一息吸い込んでから、煙を転送台の上に吐き出し右手を挙げた。原が「OK」と言って転送機のスイッチを押した。転送台の上に広がっていた煙が消え、ミスターQ Tの前に霧が懸かったようになってきた。ミスターQ Tはむせ込んでしまった。辺りがしいーんとなった。政務次官が言った。

「まだよく分からないが、まあ番組は録画してもらいましょうか」

ほかの学者達は一言も言葉を口にしなかった。若手のキャスターと、ゲストの女優が到着した。小清水は先ずキャスターと女優に概要を説明した。キャスター達がスタンバイすると小清水がスタッフに合図を送り、録画が開始された。

「ジャジャーン！おもしろステージの時間がきました。みなさあーん、テレビの前に集まっていますか!? さざなみおおなみ 細波大波です。視聴者のみなさん、こんばんは、今日のおもしろステージはあーら不思議や不思議、ここにあったものが突然消えて、ずっと遠くに現れる。ここにあるものをすぐに

どこかに送りたい、そんなときお茶の間にいてボタンを押すだけでそれを目的の場所へ送ることができる、世にも不思議なマシンを紹介します。そこにあるマシンがその不思議なマシンです」

カメラが物質転送機にパンし、アップで映し出した。

「しかも、このマシン、現実のものとして皆さんも手に入れることができるのです。みなさん、自分の部屋にあったものが一瞬の間に隣の家の居間に移動する。こんなこと信じられますか？本日のゲストはお馴染みの若原美鈴さんです」

「みなさん、こんばんは若原美鈴です。今日は世にも不思議な物質転送機というマシンを拝見することができるという話を聞いて、胸躍る心地がしています。私には普通のコピーマシンほどの機械にはしか見えませんが、皆さんはいかがでしょう？心の準備はお済みですか？」

「それでは、本日物質転送機のデモンストレーションを行って頂ける方をご紹介します。ちまたで噂のあの方、内観賢さんです！そして内観さんと一緒にデモンストレーションを行ってくださるおふたりです。おふたりは匿名をご希望ですので、仮に太郎さんと花子さんと呼ばせて頂きます。そして、本日の審査を担当して頂きます先生方をご紹介します。右から……」

賢はCBAが原と梓の素性が知れないようにしてくれていることをありがたく思った。

「それでは早速ですが、内観さん、太郎さん、花子さん、準備はよろしいですか？ではこれから皆様に実際の物質転送をごらんに入れます。その前に内観さんに少しお話を伺いましょう。内観さん、このマシンで送ることのできるものには何か制限がありますか？」

「何でも送れるはずですが、ただ生物については、遺伝子や生体組織、免疫系などへの影響など、まだ検証の済んでいない項目がありますので転送できないことになっています。それと時間を扱っている商品、たとえば時計だとか、タイマー機能の作動している機械などは転送中にほんのわずかですが時間が遅れます。このマシンで送れるサイズは1平方メートル角以内です」

「パネラーの皆さんからは何かご質問がありますか？」

国立量子力学研究所所長の安平巖夫が手を挙げて質問した。

「このマシンは、物質を分子、原子、素粒子、どのレベルまで認識しているのですか？ それと、その情報はどのように扱われているのですか？ よろしかったら教えてください」

「申し訳ありませんが、それは企業秘密です」

安平は食い下がった。

「そこをご説明頂けないとしたら……」

小清水が間に入った。

「とりあえず、先ずデモンストレーションをごらんになって頂いてからということに致しましょう」

国立遺伝子工学研究所副所長の仮小沢幸直が言った。

「このマシンが動作することで、周囲に電磁的な、あるいは放射線などの影響はありませんか？」

「全く、ありません」

「どうして断言できるのですか？」

「電磁探知機やガイガー計数機などで調べて頂ければ分かります」

仮小沢は軽く頷いた。続いて国立ロジスティック研究所専務理事の船声宗二が言った。

「このマシンで品物を転送できたとして、その品物が意図したところ以外の場所に行ってしまうということはないですか？」

「物質受け台を目的地にきちんとセットして頂ければ、それはありえませんが」

船声は顔を右斜め上の中空に向けて、口を一文字に結んでしまった。

小清水がデモンストレーション開始の指示を出した。細波が言った。

「それでは、今から人類の歴史始まって以来の物質転送機による公開物質転送デモンストレーションを行います。今日のデモンストレーションでは、内観さんは何でもいいとおっしゃいますが、スタッフが用意した雪見だいふくと業務記録ノートを転送して頂きましょう。業務記録ノートはこのように中に手書きで放送の記録が書かれています」

そう言いながら、細波はカメラに向かってノートを広げて見せた。

「それだけでも、まだ疑いをお持ちになられる方もありますので、本日のゲスト若原美鈴さんに、この宝石箱の上にメモと簡単なイラストを描いて頂き、それをデジカメで撮影しておいてから転送して頂きます」細波は20センチほどの宝石箱とマジックペンを若原に渡した。若原はさらさらと何か書いた。

「若原さんは「あら不思議、私の宝石箱、どこに行ったのやら」というメモと、少女が風船を手放して追っている漫画チックなイラストを描きました」

細波はそれをカメラに向けて示し、そしてスタッフの持って来たデジカメでそれを撮影し、液晶上にその画像を表示して見せた。

「本日はデモンストレーションですから、パネラーの皆さんの机の上に転送して頂きましょう。それではお願いします」

そう言うと、皿に載せた雪見だいふく5個と業務記録ノートそして若原がイラストを書いた宝石箱を用意したキャスター付きのワゴンの上に置き、その中から宝石箱を梓に渡した。梓はそれを手にして転送台の上に置いた。細波の合図で宝石箱は一瞬で安平の前に移した受け台の上に転送された。若原はパネラーの所に行ってその宝石箱を確認し、確かに自分の書いたものだと言ってからパネラー全員に確かめさせた。梓は次に記録ノートをセットした。それは仮小沢が手を伸ばして自分の前に移した受け台の上に転送された。最後は雪見だいふくだった。

「太郎さん、どこに送りましょうか？花子さん、準備はいいですか？」細波が言うと賢が応えた。

「この受け台を持って手前に差し出していてください。その上に転送してみましょう」

そう言って、賢は細波が台を水平に持っていることを確かめてから、原に合図した。原はOKサインを出した。賢が元の位置に戻ると、小清水が合図した。細波が言った。

「それでは、お願いします」

ほとんど同時にカタと音を立てて、受け台の上に皿に載った雪見だいふ

くが現れた。若原が手を叩いて喜んだ。

「これ、たべられるんですか？」

細波の言葉に、賢はすたすたと歩み寄ると大福を一つ手で掴み、自分の口の中に放り込んだ。

それからパネルディスカッションが行われた。4人のお偉方はいずれも否定的な発言を繰り返した。自分の目の前で起きていることをマジックショーのように捉えていた。安平の頭の中には素粒子理論が渦巻いていた。どの理論をこねくり回しても、結論は出ないようだった。どうしても原理を知りたいようだった。

「商品として売り出すのでしたら、少なくとも安全性が保証されていなくてはならないと思います。原理を明らかにできないのでしたら、せめて考え方だけでも公開して頂かないと、このマシンがまやかashiでないと認めるわけにはいきませんが・・・」

賢は応えた。

「時空の移動です」

全員沈黙してしまった。小清水の目配せで細波が言った。

「いろいろ意見や考え方が討論されましたが、現実には品物が転送できるということが分かりました。それではパネルディスカッションはここで打ちきりとして、内観さんにこの商品についてお話を伺いたいと思います。発売時期、発売の方法などを簡単にご説明頂けますか？」

「はい、このシステムは来週から受注を開始いたします。ただ現在は製造能力が小さいので、発注頂いてから納品させて頂くまでに多少時間を頂きたいと思います。今ご注文頂いた場合、納品は3ヶ月後になると思います。当面はリースという形を取らせて頂きます。どうしても買い取りをご希望の場合は、価格は5年のリース額相当とお考えになって頂きたいです」

「内観さん、太郎さん、花子さん、ありがとうございます。それでは本日の物質転送機のデモンストレーションはこれをもって終わらせて頂きたいと思いますが・・・」

細波の言葉が終わるか終わらない内に、船声が言った。

「もし、このシステムが自由に販売されたら、現在のロジスティックは全く様相が変わってきてしまうと思います。小物を運ぶ運送業者は廃業でしょうね」

仮小沢が言った。

「否定的な意見ばかり言いましたが、もしこのマシンが生態系への影響が無いということになると応用範囲は飛躍的に広がります。もっと精度を高められれば、脳外科手術や、介護医療などへの応用ができるようになるでしょう。夢のような世界が実現する可能性を秘めていますね」

原が初めて口を開いた。

「このマシンの可能性は無限です。まだまだ、改良してゆく予定です」
ここで放送の録画は終了した。後はCBAが編集して、10日後に放送することになった。

賢たち3人は遅い昼食を摂るために久しぶりに門前仲町のファミリーレストランに行った。賢は祐子と亜希子を思い出し、目頭が熱くなるのを覚えた。

賢たちが札幌に戻った翌日、家に電話が掛かった。受信システムが自動応答を返した。賢は録音された内容を確認して驚いた。物質転送機を購入したいという電話だった。まだCBAの放送までに9日もある。どうして情報が漏洩したのかと思った。電話の自動応答では1台9千万円と回答するように設定してある。電話の相手は即金で支払うと言っていた。声に外国人訛りが感じられた。自動応答では、こちらからの連絡を待つようにと伝えてあるはずだった。賢は電話の自動応答の文言に「実際の出荷は3ヶ月後になる」という内容を追加した。

その後も問い合わせの電話が続いた。梓がデータベースを作成し、受信情報の管理を始めた。

CBAの放送の当日、賢達4人はリビングのソファに座り、テレビに集中した。放送は録画の時とほぼ同じ内容だった。特に大きく修正されている部分は見あたらなかった。ビデオの画面と、問い合わせ電話やファックスの受信状況が公開されていた。番組途中から局に用意された全ての電話が問い合わせで通話中になり応答不能になった。全てのファッ

クスから連続して受信用紙が排出されている。キャストがその状況を説明した。

「申し訳ございませんが、ただいまお問い合わせの電話への応答ができなくなっています。ものすごい反響のようです。ファックスの内容を紹介してみましょう」

キャストは沢山のファックス受信用紙を手にして、順次目を通してから言った。

「ほとんどが、販売についてのお問い合わせのようです。中にはこれがマジックかというご質問もあるようです。運送業の方からのお問い合わせというかご批判があります。具体的には読み上げませんが、かなり辛辣なおっしゃっておられます」

反響は賢たちの予想通りだった。

「原さん、このマシンは本当の物質転送機に見えるよ」

愛子が言った。

「愛子さん、本当の物質転送機だもの」

原がほほえみながら言った。

「ううん、そう謂うことじゃなくて、まやかしに見えないってことよ。あの台がいいわ。あの台の上に置くと本当に転送されるイメージが湧いてくるもの」

「そうね、私もそう思うわ。初めのようにサークル内の物質を転送して、どこにでも顕れるより、もっと本物っぽく感じるわね」

「賢さん、正解でしたね」

原もうれしそうだった。愛子が電話の自動応答の音に気付いて言った。

「賢パパ、さっきから、ずっと電話が自動応答しているよ」

「うん、事前に予想しておいて良かった。応答だけで何もできなくなっちゃうからね」

梓がPCを立ち上げて電話の受信状況を確認し、賢と原に状況を説明した。既に55人に自動応答していた。要求されている内容は、価格と納期、それに出張デモの可否が大半だった。問い合わせはほとんど大手企業からだった。賢たちは出張デモの要望に対しては否定応答するように

設定してある。それでもパンフレットや説明書が欲しいという要望が寄せられていた。中に何通か意図不明な電話を受信していた。このマシンの目的や技術的背景に対する詮索の電話もあった。賢と原はいよいよ佳境に入っていくことに身震いを覚え、気を引き締めた。

スーダン

サスカブに首長の座を譲っても、部族の者たちの祐子への信奉は薄れることがなかった。フルマの運営については、祐子はまだ指導的立場から降りることはしなかった。スバハについては、部族間衝突で夫と生まれたばかりの息子を失ったアイリーン（Irene）という女性に乳母役を任せることにした。アイリーンはまだ40歳前の女性で、出産後に一月も経たず我が子を目前で撲殺された。夫は戦闘で死亡し、自身も猛り狂った敵方の沢山の男達に陵辱された。何度も自殺を試みたがその都度、部族の女性達に救われてきた。心の奥にある深い傷跡は、この生で癒えるとはとても思えなかった。祐子がそんなアイリーンと出会ったのは、クツの首長の家に行った帰りだった。祐子の光輪に包まれた姿を見て「神のようなママ・ユウコにこの人生を託そう」と決心したのだった。彼女はすぐに祐子のもとを訪れた。そして、自分の決意を話した。祐子はアイリーンのこれまで生きてきた経緯を聞いて、彼女を自分の近くに置くことにした。祐子は自分自身のことをする時間が無いほど多忙だった。アイリーンは祐子の身の回りの世話をした。食事から洗濯、衣類の整理、部屋の清掃、入浴の支度、そのほか祐子が生活に必要なことは殆ど彼女がこなした。アイリーンはようやく孤独から立ち直ってきていた。アイリーンも祐子の子供が生まれるのを、首を長くして待っていた。マリー・ジュベステルはフルマの仕事に忙殺されていたので、祐子にとってもマリーにとってもアイリーンという存在の出現は、天からの授かりものででもあるかのようにありがたかった。祐子は生まれ来る子をこの女性に託そうと決心した。出産の時もアイリーンは祐子の近くに居て、祐子

とともに陣痛を乗り越えた。出産は無痛分娩だった。祐子は瞑目している間に胎児が自分で外に出て行くのを感じていた。

祐子は母乳を与えるときだけスバハを抱いた。スバハは愛おしかったが、その愛をアイリーンを通してスバハに与えるように努めた。アイリーンの他にも祐子の周りをいつも沢山の女性達を取り巻いていた。亜希子もその中の一人だった。多忙の中でも、祐子は9時を過ぎると亜希子とふたりきりで過ごすことにしていた。亜希子もその時間を楽しみにしていた。スバハが生まれて1ヶ月が経過した頃、祐子と亜希子はラジオで、スーダンで多くの市民が殺戮されたというニュースを知った。ふたりは涙を流してそのニュースを聞いた。十数年前にスーダンは南部が独立を宣言し、アメリカがそれを支援してスーダンから独立を果たした。しかしアビエイ地区など石油を産出する地域がどちらに帰属するかをめぐり北部と南部が意見衝突し、多くの人々が犠牲になった。今も紛争が続いている。それと時を同じくしてアフリカ北部の各国で、独裁政権に反発した国民戦線が政府打倒を掲げて蜂起し、各地で悲惨な殺し合いが勃発した。各国の政府は、国軍を掌握していたので、国民戦線は各地で激しい攻撃を受け、多くの罪も無い国民が殺された。その時の傷もまだ癒えていない。特に最近の南スーダンでは秩序の乱れが最悪の状態に至っていて、国民を救うはずの政府の機関が国民を蔑ろにし、政府軍の者たちが窃盗や強奪、レイプなどありとあらゆる犯罪を公然と行うようになってきていた。ふたりはどうしていつまでも同じようなことが繰り返されるのかと思うと、やりきれない気持ちで一杯になった。ある日、祐子が亜希子に言った。

「スーダンに行こうか。」JWAという組織から、ルワンダの食料を供給して欲しいという申し出があったのよ。あの国は西部ダルフル地方や他の非アラブ系の人達と政府の支援を得たムスリムの間で武力衝突や住民の殺戮が起きているでしょう。鹿島さんは、危険だからこの取引は断った方がいいと言っているけど。スバハが生まれるまでは、わたしも慎重でいたの。だけど、今はアイリーンがスバハの面倒を見てくれるから、わたしはこの取引を進めてみようと思っているのよ。それは、

J JWAが生活の厳しい者達への食料援助のためだと言っているから。支払いの遅延などの心配はあるけど、そんなことより毎日食べるものも無く飢えて亡くなっている人たちが沢山いると聞いて、じっとしていられなくなってきたのよ。一度視察に出掛けるわ」

亜希子が応えた。

「由宇お姉様、わたくしJ JWAが政府を後ろ盾にして、非アラブ系の人たちの虐殺をしているという話を聞いたことがありますけど、そんなことはないのですか？」

「私もその話は聞いたわ。でも、憎み合うのは攻撃する方にも、攻撃される方にも原因となる要素があるんじゃないかと思うの。その根本的な原因を取り除かないと、一方的に攻撃する方だけを攻めても、問題は解決しないと思うのよ。「虎穴に入らずんば、虎児を得ず」でしょう」

「はい、由宇お姉様とならどこにでも行けます。どこまでも附いて行きます」

亜希子は応えた。

「スーダンや南スーダンは厳しいところよ。ここのような素晴らしい土地じゃないわ。生きることも厳しいし、戦闘地域だから危険だし。あなた、大丈夫かしら？特にスーダンに向かう途中、南スーダンを通らなければなりません。あそこは秩序も乱れて無法地帯化しているのよ。だから休戦協定の間を狙って移動しなくてはならないわ。あなた、ただ困っている人を救うという意気込みだけでは済まないかもしれないのよ」

祐子が心配そうに言った。

「由宇お姉様、わたくし一人置いて行かないでください」

「戦闘の真ただ中に入っていく可能性もあるのよ。そんな中で生きることと苦しんでいる人たちを助けてあげるのよ。暫くあの国の人たちと一緒に生きることになるかも知れないのよ。それでもいいの？」

「わたくし、もう何でも食べることができるようになりましたし、少しくらいシャワーを浴びなくても平気です。それに、あのクリミア・コンゴ出血熱で一度死んでいます。だから、もう何も怖いものはありません

「……あのとき、あの方が助けてくださらなかったら、今ここに
いることもありません」

「あの人、元気なのかしら？」

「お会いしたいです。どうしているのでしょうか？」

「コンタクトしてみようか？」

「はい、お姉様、テレパシーで繋げて頂けますか？後で、わたくしもお
話ししてみたいです」

亜希子がそう言うと、祐子はすぐに瞑目し、想念の浄化を行った。そし
て意識を賢に向けた。もう祐子にはボールは必要なくなっていた。そう
なってからというもの、ボールの所在が分からなくなっていた。

「あなた、あなた、応答してください……」

賢は夢で祐子が呼んでいるのを聞いた。よほど疲れていない限り、睡眠
中でも賢は常に意識を目覚めさせている。祐子の呼び掛けがリアルに感
じられた。

「あなた、私よ、祐子よ」

賢は目覚めた。時計を見ると5時までにはまだ10分ほどある。

「祐子か？元気でいたか？」

「あなた、亜紀も一緒にいるのよ。お話しできるかしら？」

「スバハは元気か？」

賢は祐子がスバハを出産した時大きな波動を受け、身体に喜びが広がる
のを感じた。すぐに祐子の意識にコンタクトした。そのときの祐子は出
産の喜びで満たされていた。あのときから1ヶ月ほど経っている。何か
あったのかと思った。

「あなた、こちらはみんな元気よ。皆さん変わらない？今、どうしてい
るの？」

賢は現在、札幌に移り住んで、4人で同居生活をしていることを伝えた。
OVSの売り上げが順調に伸び、原の発明の第2弾、物質転送機の発売
も近いと言った。東領製作所を退社し、これから物質転送機の販売に集
中するつもりで、多分忙しくなるだろうと伝えた。

「あなたは愛子さんの父親、私はスバハの母親、お互い子持ちになった

わね。あなたの娘さんは随分大きいけどね。元気にしているかしら？」

「愛子は相変わらず元気だよ。札幌の高校に入ったよ。ロシア行きは取りやめにして、札幌のバレエスクールに入ったんだ。それより祐子、フルマはうまくいっているのか？ 亜希子と一緒に日本に帰って来ることはできないのか？」

「あなた、私はあまりにも深くこの世界に入り込んでしまったから、もう暫くはこのアフリカという世界から出て行けそうもないわ。まだ沢山の国が内紛で苦しんでいるの。少ししたら、そういう国に行ってみるつもりよ。想像できるかしら、何万、何十万という人たちが、無慈悲に殺戮されている世界。毎日食べるものがなくて、子供に与える乳も出ない母親、子供に乳を与えながらこときれてゆく母親の姿を、私も亜紀も何度も目の当たりにしているの。戦闘の結果、あちこちにばらまかれ、取り除かれることもない地雷で足を失い、手まで失った子供達が無謀でも必死に生きようとしているこの世界。この中央アフリカは、そういう悲劇が現実存在している所よ。それでも、ここに生きている人たちは、日本に居て、会社から給料をもらって、着ること、食べること、住むことに何のありがたさも感じなくなっている人たちなんかより、ずっと、ずーっと自分を生きているわ。必死に生きているのよ。私はこの人たちの生き様を目にすると、人間の本来の姿を見ている気がするの。その必死に生きている人たちを、やれ部族が違うだとか、思想が違うだとか、違う神を信じているだとか、学力が足りないだとか、そんなくだらない理由で虐殺してゆく。部族間に憎悪の念を引き起こさせ、発狂の無限ループを造り出して、お互いに殺戮し合うようにし向ける。自分たちは他の国の人たちより進んでいると自称する人々によって引き起こされたことなの。政治とか、宗教とか、貿易とか、経済とか・・・人間の存在とは何の関係もないことが原因で・・・一体なぜなのでしょう。私は放っておけないわ。私はこの人たちが普通の生活ができるようにならない限り、たとえ自分の命が尽きても、ここで人々を救ってゆくわ。自分が生きることで、他の人の存在が邪魔になる・・・一刻も早くこんな矛盾は解消してしまわないと・・・」

祐子の声が詰まったように途絶えた。泣いているのが分かった。

「祐子、いや由宇、随分つらい思いをしているな。お前と亜紀は人間社会の陰の部分に入り込んで生きているんだな。お前達をはじめ、沢山の人がこの世界の暗く沈んだ部分に光を当て、必死になって深い暗黒の世界に住むことを余儀なくされた人々を境界面まで浮上させようとしている。世界は必ず変わる。お前達の力がそれを引っ張ってゆく。一方で栄華を極め、贅を尽くし、自分の意識を横目に見ながら、バランスを欠いた思考で、足ることを知らずに自分たちの快適さをどこまでも求める者たち、他の存在を自分の思う通りにしてきた人々に、今破局が訪れてきている。それはこの世界の道理で、自分が極に達したという意識を持つ者達は必然的に落ちてゆくしかないんだ。中なる位置まで落ちて来ると、自分たちが恰も不幸のどん底にでもいるかのような錯覚に襲われる。一方陰の極に達した人たちは、もうこれ以上苦境に喘ぐことはない。そのままでも次第に浮上してきて、中なる位置まで到達したら、最も幸せな生を生きることになる。どちらもその中なる位置に住することで満足しなくてはいけない。渴望が必要な時代は終わるのだ。由宇、がんばってくれよ。俺も別の切り口から、この世界がバランスを取り戻すように努力してゆくから・・・少し時間が掛かるけどな・・・」

「あなた、分かったわ。何時になったら世界は調和できるのかしら？」

「もう、それほど先のことじゃないと思う。俺たちはその先鞭を付けるという使命を持って生まれてきたんだ。由宇、そして亜紀、それから俺たちの周りについて、俺たちを助けてくれている人たち、鹿島、香川、サスカブ、マリー、梓、原、みんな俺たちの仲間だ。由宇達と同じように、俺たちも一つのプロトタイプを作り、それを日本から世界に浸透させてゆく。世界がバランスを取り戻すためにな。俺たちは自分自身を超えて生きることを運命づけられているんだ。俺はお前のことも、亜紀のことも、自分の一部だと思っている。そして同時に、俺はお前のそして亜紀の一部なんだ。俺たちは3人で一人の身だ」

「ええ、私もそう思っているわ。あなた、今亜紀に変わります。意識を亜紀に向けてね」

祐子は巫希子に頷いて見せた。

「あなたですか？わたくし、巫紀です。あなた、お会いしたいです。わたくしはまだ、由宇お姉様の様に人々を明るい光で包むようなことはできませんが、苦しんでいる人々を一人でも多くお救いして差し上げたいと思っています。わたくしには力がありませんから、何度もあなたに助けて頂かなくてはなりませんでした。でも、ここで由宇お姉様のお働きになっている姿を拝見していて、自分の弱い部分や愛情の足りない部分が分かって参りました。わたくしは人々をお助けしたいと思って行動するのですが、由宇お姉様はそこにいらっしゃるだけで人々をお救いになっていらっしゃるのです。あなた、この間は、由宇お姉様が死にかけていた子供をお救いになられたのですが、その子は小児ぜんそくで痰がのどに詰まって窒息死寸前でした。母親はその子を抱きしめて泣いていました。その子はもう咳をする力もなくなって顔も青黒くなっていました。その子を由宇お姉様がお見舞いしたのです。由宇お姉様は母親の手から、冷たくなっているその子を抱き上げると、目に一杯涙をお溜めになりました。その涙の一滴がその子の頬の上に落ちました。その涙が頬を流れて唇に触れたとき、その子の目がぱっちり開いてその子は大きく咳をしました。喉の奥に詰まっていた、痰が飛び出しました。その痰が由宇お姉様の頬に当たりました。しかし、その痰はきらきらきらめくように消えてゆきました。まるで雪のように。子供は大きく息を吸うと、由宇お姉様の顔をじっと見て「ママ」と言いました。みるみる顔色が赤みをさして来て、嬉々とした顔に変わってきました。由宇お姉様は、軽く頷くとその子を母親の手にお戻しになりました。母親の顔は涙でくしゃくしゃになっていました。母親は愛し子を抱きかかえて、涙にむせびました。近くで見ていたふたりの看護婦はその場に跪き、由宇お姉様に祈りを捧げました。由宇お姉様はにこにこして、子供の頭を撫でるとその場を立ち去ったのです。由宇お姉様は「私は何もしていないわ。ただ、あの子が自分と同じだと感じただけなのよ」とおっしゃっていました。わたくしは慈悲ってこれなんだと思いました。わたくしにはまだできませんが、少しずつ由宇お姉様を見習ってゆくつもりです」

「亜紀、君も決して由宇に劣らないだけの愛情があるよ。君は既に亡くなってしまっている人たちを救おうとしているだろう。これは普通の人間にはできないことだよ。死んだ人を救うなんて、一体誰ができると思う？君しかできないことだよ。もっと自信を持てよ」

「あなた、ありがとう。あなたにそう言って頂けると、それだけで勇気百倍ですわ」

「亜紀も日本には戻らないつもりか？」

「わたくしはどこに居なければならぬということはありません。由宇お姉様と一緒に居られればどこでもいいのです。由宇お姉様と一緒に人々をお救いできれば、特に日本に戻りたいという望みはありません。日本でなくてもいいのです。本当はあなたが近くにいらっしやったらどれだけいいかと・・・それは無理ですわね」

「亜紀、もう俺とお前の間には空間的な隔たりは存在しないだろう。この世界に居ても、霊界に居ると同じように生きることができる。一緒に居ると同じじゃないか」

「いいえ、やはり違いますわ。あなたのお婆がいつも近くにあること、これがわたくしの唯一の望みなのです」

「亜紀、いずれ一緒に生きてゆくときが来ると思う。それまで元気で生きてゆけよ。決して無謀なことをするなよ」

「あなた、分かりました」

「ところで、さっき由宇も言っていたが、別の国の救済に出掛けるのか？」

「はい、由宇お姉様はスーダンに行くとおっしゃっています。あの国に拠点のある J J W A という組織から、フルマに食糧支援の要請が来ているのです。由宇お姉様は、来週にでも現地に入って実体を把握して来るとおっしゃっています。わたくしも同行させて頂くことになっています」

「ちょっと待てよ、確か J J W A は攻撃的な組織だと聞いたことがあるが、大丈夫なのか？亜紀、ちょっと由宇に話に加わるように言ってくれないか？」

亜希子が祐子に合図をすると、祐子からメッセージが届いた。

「あなた、大丈夫よ。ルワンダにはスーダン政府からも援軍の要請が来ているの。内紛を鎮圧するためという名目らしいけど、そのとき一緒に軍に附いて行くことにしたのよ。それなら安全でしょう。軍が間接的に私たちを護衛してくれるわ。政府軍にもう一度打診してみるつもりよ」
「そうか、だが危険が迫ったら、必ず連絡をよこせよ。すぐに駆け付けるから」

CBAの放送があつてから物質転送機の情報も、あつという間に日本全国はもとより海外にまで伝わった。様々な憶測が飛び交い、CBAは物質転送機に関する問い合わせへの対応に四苦八苦した。賢と原は当初「金額の高さからして、引き合いはそれほど多くないだろう」と高をくくっていた。しかし実際は、放送の翌日の午後には、CBAが問い合わせへの対応にギブアップし、どんな問い合わせも全て賢の家の電話に自動転送すると通達してきた。おかげでメインの電話は殆ど繋がらなくなってしまった。梓は顧客データベースへの情報入力と、データ分析で多忙を極めた。放送から1週間経過した段階で、すでに53台の受注を受けていた。

「原さん、その工場だけではとても捌ききれなくなりそうですね」
賢が言うと、原は頷いた。

「時期を見て工場を買いませんか？それと従業員の募集をしなくてはならないでしょう。現在受注している53台もそんなに簡単にはできませんから、暫くの間一般の回路部分は製造外注を使って急場を凌ぎましょう。勿論コア部分と秘匿性の高い部分は社内で製造した方がいいでしょうけど」

物質転送機の製造も軌道に乗ってきた。コスト見積もりをそれほど厳しく要求しなかったため、製造外注は能力の高い会社を選ぶことができた。モジュール単位の発注だったが、納期はきちんと守られた。従業員は全て正社員として雇った。総務部門を作り、福利厚生に漏れのない様に気を配った。様々な対策の結果と梓のデータベースを活用した統計的受注量予測のおかげで、将来の受注量を見越した製造数量の決定と原材料・

部品の手配ができるようになった。その結果、CBAの放送があった翌々月から製造が受注に追従するようになった。買い取りよりリースが圧倒的に多かった。放送の翌月には海外からの注文も入り始めた。最初の月の製造は120台、翌月は330台と製造台数は一気に増加していった。

OVSを製造販売する内観システムズは株主総会で数馬を社長にする案件が承認され、名実ともに数馬がその手腕を発揮する場面が整った。OVSは既に受注ベースで月産10,000台の大台を超えていた。

6月の中旬になって数馬から賢のスマホに電話が掛かってきた。

「賢、物質転送機の伸びは凄まじいようだな。俺のところもすごい勢いで伸びているんで、国内に1拠点増やして、それから海外にも進出しようかと考えているんだ。最初はアメリカになるかな。アジアの国々も急成長で伸びているから、おもしろいかも知れないけど、マーケティングのやり易さからして、アメリカの西海岸あたりがいいんじゃないかと考えているんだ。どうだろう？」

「数馬、おまえの言うように最初はアメリカがやり易いだろうな。アジアの国々は政府のコントロールがあったりして、気が許せないからな。だけど、アメリカの場合、警戒が厳重とは謂えテロや犯罪組織からの攻撃を念頭に置いておかなくてはならないぞ。その点は十分に注意した方がいい」

「うん、そのことは俺も一番懸念しているところだ。先ず、アメリカで会社を設立するところから始めるよ。また、相談に乗ってくれよな。それから、今サウジアラビアのアブジル・バムリという企業からすごい話が来ているんだ。この会社はディズニー・ランドに対抗できるような巨大なエンターテイメント・シアターの建設を計画していて、その中核になるセントラル・シアターにOVSの仕組みを組み込みたいと考えているが、可能かどうか検討して欲しいと言ってきたんだ。すぐに俺の直下に検討プロジェクトを発足させた。賢、どう思う？」

「そのシアターで何を見せるんだ？」

「うん、なんでも、昔の偉人の霊にコンタクトして、巨大なスクリーン

でその人物の生の声や映像を紹介しようとしているようなんだ。勿論、映像を公開する前には、事前に十分な調査とその対象となる霊とのコンタクトをし、了解を得た上で行うと言っている。もし、この話が軌道に乗ると、トータルで5000億円規模の受注になるんだ。シアターのスケールもさることながら、その展開計画も半端じゃない。目標として各国に最低1箇所は建設すると話しているんだ。オイルマネーだよ。リーマンショックとその後の経済危機でだぶついたマネーをはき出そうとしているようだな」

「数馬、各国1箇所？あり得るか？アフリカはそれどころじゃないだろう。食料の確保に四苦八苦している国も多いんだぞ……まあ、それは別としてもすごい話だな。何とかやり遂げてみるよ。だけど、原さんを酷使したら駄目だぞ。原さんに頼らなくてもできるのか？」

「実はそこが一番問題なんだ。まずは原さんの思考をフォローできる人材の確保をしよう今募集を掛けているところだ。どこかに最適な人材はいないかな？」

「よし、その件は俺が何とかするよ。原さんとも相談してみる」

「賢、それから、お前と一緒に働いていた雪坂を雇ったぞ。お前との約束通り俺の秘書兼海外文書担当になってもらった。彼女、結構クールなところがあるな。お前のことを聞いても「知りません」と素っ気ないんだ。まあその方が仕事はやりやすいけどな」

「そうか、康子は東京に行ったのか。でも、よかった。どこに消えたのか心配していたんだ。孤独な女性だから、大切にしてくれよな」

「分かった……じゃあ、人材の件、よろしく頼んだぞ」

賢は数馬と約束した人材を原友昭語録研究会の会員の中から、選ぼうと考えていた。原に相談すると、「所長に相談した方がいいと思います」と言った。原は時々馬場所長とコンタクトを取っていて、外で会おうと話を持ちかけたが、馬場は拉致されて以来あまり外に出たがらなくなったため、電話で話すだけになってしまっていた。原が馬場に電話を入れた。

「馬場さん、その後何か変わったことはありませんか？少し相談したい

ことがあるんですが・・・」

「どげんしたと？こっちな変わったことと言いますと、最近急に入会者が増えてきたこつんそ。殆ど賛助会員じゃっど、このところかなり先端科学に精通した衆からのアプローチがありもした。いろいろ審査して、正会員になってもろた人も5人増えもした。すごか人もおいもすど。とこいで、お願いってなんでしょう？」

「先端技術のことが分かる人で、現役のシテム・マネジャーの様な仕事をしている人がいたら紹介して欲しいんですけど・・・」

「そや、あいもすが・・・一人でよかどか？」

馬場は7人のシステム・エンジニアを紹介してくれた。東海地震の救助活動の様態をテレビで見て、この世界の構造に疑問を感じた者達だった。馬場は、最近特にシステム・ソフトを設計している者からのアプローチが多いと言った。原はOVSの開発に参加してもらえそうな正会員の中から5人を選んだ。原が賢に5人の名前と電話番号を伝えた。3人は東京、大阪と仙台にそれぞれ1人、いずれもシステム・ハウスに勤務している中堅の男性達だった。賢は早速電話してみた。いずれに対しても、時空間についていくつかの質問をし、その応答の仕方からシステム・エンジニアとしての技量とマネジメント能力を推測した。その上でOVS関連の大プロジェクトに参加しないかと打診した。東京のひとりを除き、全員が検討させて欲しいと応えた。ひとりは明らかに職業を偽っていた。システムに関する知識を持ち合わせていないことでそれが分かった。4人からはその週の内には回答があった。全員、給与などの条件次第では参加しても良いという応えだった。給与の提示は数馬に任せることにして、賢はすぐに数馬に連絡を入れた。数馬は喜んだ。

6月になって海外の科学関連の雑誌社3社から、物質転送機に関する原稿の依頼が舞い込んだ。賢は多忙を理由に、それらの依頼を全て断った。国内の科学雑誌社5社からも再三にわたって取材の問い合わせがあったが、その中の月刊ハイゼンシュタイン社に対してだけ取材を受け入れることにした。その雑誌のコンセプトが時空間と意識の関係の探求にあるということを知ったためである。もっとも、その雑誌の扱っている時空

間とは3次元での話であって、物質転送機が扱うような内容ではなかったが、賢は虚空間の概念を伝える良い機会だと考えたのだった。それ以外の雑誌はまだ賢や原の考えを受け入れるだけの素地が固まっていないと判断した。

物質転送機はマシンの筐体を開けると、システムが破壊される装置を組み込んであり、そのことに関する注意書きをリース契約書、売買契約書、梱包カートン、開梱注意書用紙、取扱説明書、マシンの裏のラベルに執拗なほどに説明してあったが、それでも出荷後、半数近くのマシンが初期不良ということでクレームを受けた。サービス担当の分析結果は、クレームの全てが、ケースを無理に開けた為に起きたトラブルであった。予想していたこととは言え、そのことにより多くの企業や研究施設が物質転送機の技術を探ろうと躍起になっていることが伺えた。サービス担当の窓口では、購入者やリース者によるマシン筐体のオープンを理由にマシンの修理を受け付けないことに対する罵詈雑言を浴びせられ、ストレスが貯まってきていて、心身症に陥ってしまった者も出てきた。賢と原は時々状況把握のため現場の視察と、担当者への慰問を行うことにし、サービス担当者には特別手当を支給することに決めた。そして、サービスの一次受付を電話の自動応答に切り替え、その中でケースを無理に開けた場合のクレームの受付はできない旨を伝えるようにした。しかし、リースでも月100万円ほどの金額になっていたのも、それに対する契約者の反発も大きかった。

物質転送機の技術の探求はあらゆるところで始まった。しかし原の組み込んだケースオープン時の破壊処理、ハードウェア、ソフトウェアの暗号化などの防御機構の為、誰もマシンそのものを模倣したり、リバース・エンジニアリングで構造を解析したりすることはできなかった。一方で機械を用いた様々な物質の転送が試みられているようだった。懸念された動物や植物の転送も試された。幸いなことに、いかなる不具合も発生しなかった。それは転送領域を完全にボックスで囲うことにしたためであり、その対策が功を奏していた。マシンの信頼性の高さが次第に評価されるようになってきた。運送会社は殆ど3年契約のリースで契約し

た。市場に超特急便という名前の小荷物配送サービスが誕生した。日本国内、道路の整備されているところなら最短で1時間、遅くとも8時間以内に小荷物を届けるというサービスである。これはあつという間に大評判になった。各放送局が次々に特番で取り上げた。超特急便の送料は通常の速達便に対して3倍から5倍の金額が設定されていた。それでも利用者が急増していた。日本郵政グループから問い合わせがあった。現在の郵便システムに物質転送機を使うことを検討したいということであった。RFP（提案要求）に対して提案書を提出して欲しいとのことだった。民営化から法人化した郵政事業の中に取り入れようとしているようだった。しかし、それには膨大な設備投資が必要であり、設備投資の償却に妥当性があるかどうかの判断がまだ下せていないようだった。提案書は梓が作成した。梓の業務も多忙を極めてきていた。原はちよくちよく東京や鹿児島に出張した。出張するときは慎重を期して、必ず変装して出掛けた。髭を付け、鬘かつらを被り、眼鏡をサングラス風のものに替えた。衣類は原のもっとも嫌いな背広とネクタイを敢えて身に着けた。原はこの世界に存在しない筈の人間だった。高校に進学してから、愛子も土、日に宿泊でバレエ公演を観に出掛けることが多くなった。由仁の家に賢と梓がふたりきりになることもしばしばあった。そんなときは梓が朝からそわそわしていて、賢が近付くと、心臓の鼓動が激しくなった。賢もそんな梓の心の動きを知って、時々キッチンに立っている梓を背後から抱きしめたり、ソファでくつろいでいるときに口づけを交わしたりした。梓の顔は上気して、うっとりしていた。ムクウからの通信も無くなっていたので、ふたりきりの夜は賢が梓の寝室を訪れた。この日も梓はネグリジェ姿で賢を受け入れた。梓には祐子の様な積極的な動きはなかったが、賢が抱き締めると、賢の背中に回した手に力を入れて賢を引き付けた。梓は本当の妻だった。

「あなた・・・わたし・・・幸せ」

瞑っていた目をそっと開いて、梓は賢の目を見詰めて言った。

「梓、こんな俺に附いてきて不安は無いか？」

「いいえ、あなたのことを愛していますから。永遠に附いてゆきます」

「梓、俺と一体になれるか？」

「私でもいいんですか？」

「馬鹿なことを言うな。梓、思考を止めろ。いま、この世界には俺とお前しか存在していない。俺はお前と一つになると、命を逆らせることができる」

「あなた、私の身体の中にあなたの子供を・・・・・・・・あなたとふたりで・・・・・・・・」

賢は思考を全て捨て去った。梓は賢に抱かれたとき既に思考は消えていた。梓の意識の中に赤い炎が見えた。辺り一面真っ赤な光に包まれた。そしてその赤い光に自分が完全に焼き尽くされているのを感じていた。その赤い光が燃え尽きて消えると、自分が虹色の空間の中にいることを知った。あまりの美しさに、梓の目から涙が流れ出た。虹色の空間に金色の存在が映し出された。それは紛れもなく賢の姿だった。梓はその賢の中に吸い込まれてゆく自分を感じた。吸い込まれた自分が賢に変化したのを感じた。自分が自分を抱いているのが見えた。言葉では表現できない恍惚感の中に浸っていた。やがてその恍惚感が頂点に達したとき、再び意識が自分に戻っていて、そこで、太陽の輝きが自分の身体の中に顕れた。その太陽は見詰めることのできないような真っ白な輝きを発して、そこから一つの小さな玉が生み出された。梓はあまりの恍惚感に意識を失った。梓は賢のソフトな息づかいと、唇に感じた優しい口づけで意識が戻った。

「あなた・・・・・・・・」

梓の目から涙が流れ落ちた。

「赤ちゃんが生まれるわ。あなた・・・・・・・・」

「梓、君は、ほんとうに美しい」

梓は鼻歌を歌っている。どこかで聞いた童謡だ。梓は昨夜の夢心地が今も残っている。五木の子守歌だ。賢が居間に入って来ると梓は心臓の鼓動が激しくなり、顔が紅潮してくるのを覚えた。

「梓、おはよう」

「おはようございます」

「もう、起きていたのか？」

「ええ、私は妻ですもの、お食事の支度をしなくちゃ」

「ありがとう」

「あなた、もう顔を洗ったのですか？」

「いや、まだだよ」

賢は梓の背後に近付き肩を抱いた。梓はそのままじっとしている。賢は梓の肩を回転させて唇に口づけた。梓は目を閉じて安らかな顔で賢を受け入れた。賢は梓を離すと洗面所に向かった。厳しい北海道の冬も終わり、遅咲きの桜が咲きだしていた。洗面所の窓から遙か遠く浮かぶ薄桃色の霞みが周辺の景色にほのかな暖かさを添えている。

スーダン

祐子と亜希子は軍隊のジープに乗っていた。ふたりともサファリウェアに身を包み、兵士の被るヘルメットを頭に被っている。祐子はバラックが祐子のために作った特別仕様の座席に乗っていた。サスカブが祐子の産後の身体を気遣い、軍と交渉して座席を交換する許可を得たのだった。

「由宇お姉様、どこまで行くのですか？」

「今日は、ウガンダのマシンディあたりまでだと思うわ。隊長があつた近くのカルマ・ガメ保護区に野営するなんて言っていたわ。1週間くらい掛かるらしいわね。まだまだ遠いわよ」

まるでサファリ部隊だった。道はでこぼこしていて、これから何日か走り続けるのかと思うとふたりともため息が出た。軍隊は300人超の1師団だ。祐子と亜希子はサスカブが随行を指示した勇壮な兵士ふたりに護衛されていた。一人はジープを運転しているメドリスナという名前の背の高い頭髪が縮れた黒人で、彫りの深い目鼻立ちをした男である。もう一人はジミーという名前で、浅黒い顔の白人とのハーフで、大人しそうだ顔を見ると鋭い眼光を放つ知的な男だった。助手席に乗ってい

る。サスカブはふたりの女性に力と知恵の護衛を付けたのだった。護衛の男性はふたりとも無口だった。ジープには1ヶ月分以上の食料を搭載してきた。祐子にとっては覚悟を決めた遠征だった。鹿島も香川も反対したが祐子は押し切った。スーダンに行くには独立したばかりの南スーダンを通り抜ける必要はない。南スーダンは政府の横領や官僚の不正などの腐敗、民族間の衝突でもう殆ど国家としての体を成していない。盗賊や横領が日常茶飯事のように繰り返されている国である。そんな地域に侵入することは命を危険に晒すことだとふたりは言った。しかし祐子には頭で考える前にどうしても行かなくてはならないという強い衝動が働いていた。祐子はルワンダ政府に政府軍の遠征の時に同行したい旨を伝えたが、危険すぎるという理由で断られた。祐子は引かなかった。遂に政府は条件付きで祐子の申し出を受け入れた。政府の付けた条件はスーダンと南スーダンの休戦期間に支援の為の遠征を完了することというだった。祐子にとっては願ってもないことだった。日程は政府軍の遠征に全て合わせる事となった。護衛のふたりは政府軍の遠征計画を全て把握していた。亜希子はJ J W Aのことで祐子に質問して以来、祐子の行動に一切の疑問を差し挟まなくなっていた。昼食はジープの中で摂った。問題は水の確保だったが10日分の飲み水だけは持参した。それ以降はどこかで購入することを考えた。軍隊と一緒にいるので、何とかなるだろうと祐子は思っていた。砂埃を巻き上げて砂漠を疾駆する装甲人員輸送車10台と、武器弾薬の装甲車3台それにジープ5台の1小隊の通過を、通り掛かる住民達は不安そうな目つきで見つめていた。ウガンダの国境では審査無しに通過できた。ルワンダ政府が事前にウガンダ政府と南北スーダン当局に通行の安全確保を依頼してあったため、通行には全く支障が無かった。ウガンダに入って暫く走ると、森林地帯を抜け美しい山岳地帯を通った。そこがクイーン・エリザベス・国立公園だとジミーが言った。公園の中の湖の畔で師団は停止し、車の中で昼食を摂ることになった。兵士達は装甲車から降り、水辺に出て汗を流した。祐子達も一旦ジープから降りて身体を伸ばした。ふたりの行動に合わせて、メドリスナとジミーも車から降りたが、祐子達が再び車に戻ると2人の

男性もすぐに乗車した。4人はジープの中で昼食を摂った。遠方にキリンの群れが通り過ぎてゆくのが見えた。亜希子は先ほどまでの激しく揺れ動いた道のことなどすっかり忘れてしまったかのように祐子に言った。

「由宇お姉様、わたくし野生のきりんを見るのは初めてです。とても素敵。沢山いますね。キリンは生まれるとき大変でしょうね。生まれ出て地面に落ちたとき、あの首が折れちゃうようなことはないのかしら？」

「それが、うまい具合に産まれてくるらしいわ。出て来る時に首を折り曲げて、頭をお尻にくっつけるような形で産まれて来るんだって。ジミーが教えてくれたわ」

ジミーが自分の名前を言われて後ろを振り向いた。祐子は

「Kwamba kuzaliwa ya twiga ya.」（キリンの誕生のことよ）

と言った。ジミーは軽く頷いた。

食事を済ますと、また車は一本道をひた走った。すぐに国立公園を抜け、再び灌木のある道を突き進んでゆく。土壁でできた家々が点々と散在する小さな集落を通り抜けると、やがて陽が傾き、地平線の彼方に夕日が落ちて行った。魂がうち震えるような感動を覚える雄大な光景である。辺りが薄暗くなりかけた頃、ようやく野営場所のカルマ・ガメ保護区に辿り着いた。兵士達は草のある場所にテントを張り始めた。メドリスナとジミーは祐子と亜希子の為の専用テントを張った。それからテントから5メートルほど離れた砂地の上にトイレ用の小型のテントを張った。それは2人の女性専用のトイレだった。兵士達の内の何人かは、それが何なのか分からないようだったが、メドリスナが周囲に杭を打ってロープを駆けたので、漸くそれと気付いたようだった。

「亜紀、しばらくの間、男になりなさい。女であることを忘れるのよ」

「由宇お姉様、それは……？」

「兵士と同じような行動をする覚悟をするということよ。今は彼らふたりが守ってくれているから大丈夫だけど、これからは戦場に赴くつもりでないと生きてゆけないわよ」

「はい、わかりました。多分簡単にはできないと思いますから、由宇お

姉様、教えてください。わたくし男にはなれませんもの……」

祐子はくすくすっと笑った。

「馬鹿ね、意識よ。その気になれば、何にでもなれるわ」

「ああ、そうなのですね。分かりました。これから男になりますわ」

そうは言っても亜希子は、実感がつかめなかった。ジープを降りたときから尿意を催していたがじっと堪えていた。メドリスナがトイレを作り終え、ロープを張り巡らせると、亜希子は祐子に耳打ちした。

「由宇お姉様、わたくしトイレに行きたいの。あそこ大丈夫かしら？」

「亜紀、堂々として入ってゆくよ。おどおどしたら駄目よ。女の印象を与えては駄目。いいわね。さあ、堂々と行きなさい」

亜希子が胸を張って一步一步ゆっくり歩き、トイレ用テントの前まで来ると、さっと四方を確認してから急いで中に入って行った。祐子は亜希子の行動と周囲の男達の視線に意識を集中した。特に変わった様子はなかった。少しして、亜希子が胸を張ってテントから出て来た。

「お姉様、わたくしどうでした？大丈夫かしら？」

「あれでいいわ。だけど、ちょっと胸を張り過ぎね。もっと自然に堂々とね」

「はい、がんばります」

祐子はまたおかしくなってくすくす笑った。祐子は亜希子に言った。

「私もトイレに行って来るから、見ていなさい」

亜希子は祐子の行動をじっと見つめた。祐子が少し歩くと、ジミーが祐子の方に近付いてきて何か話し掛けた。祐子は兵士達の野営用のテントの方を眺めてジミーに一言応えた。ジミーは小走りで兵士達が立てているテントの方に向かって行った。祐子は何事もなかったように、さっとトイレ用のテントを潜り中に入った。それから少しして、何事もなかったかのように亜希子のところに戻って来た。

「由宇お姉様、トイレはお済みになったのですか？」

「そうよ」

「ぜんぜん、そんな感じがしませんでした。こういう風にすればよろしいんですね」

「そうよ、だけど、そうしようと意識しては駄目よ。人に覚られるわ。亜希子が普段しているとおりの行動をすることよ。男っぽく無くてもいいから、女っぽく無いようにね。いいわね」

「はい、分かりました」

夕食は缶詰の牛肉とパン、缶詰のスープで済ませた。水は必要最小限の使用に制限した。亜希子はそんな食事が楽しかった。祐子も亜希子とふたりで過ごす夜が嬉しかった。ふたりはテントに入ると、寄り添って横になった。

「亜紀、私たち幸せね。苦しんでいる人々を救うために行動できるなんて、なんて幸せなんだろうね」

「ええ、お姉様、わたくし、産まれてきて良かったって感じています。お姉様と一緒にいられれば他に何も欲しくありません。その上、人々のお役に立てるなんて、なんて幸せでしょう。ここにあなたの方がいらっしゃれば、もう何時死んでもいいほどですわ」

祐子は亜希子と話しながらも、テントの外にジミーが歩哨に立っていてくれることに感謝していた。ジミーとメドリスナは一晩中交代で2人の女性を警護した。

翌朝、ふたりは身支度を調べると、ジミーとメドリスナがテントを片付けるのを見守った。2人は手際が良かった。10分も掛からずにテントを跡形もなく畳んでしまった。亜希子はトイレの跡が気になった。終わった跡で砂を掛けたが、それが不自然じゃないかなどと考えてじっと見つめていた。

「こら、また女している。男に戻りなさい」

祐子が言った。祐子の意識の中には常に亜希子の存在があった。

途中グルという大きな町を通り過ぎ、昼前に南スーダンの国境を越えた。ここでも白十字の旗を掲げたルワンダ軍の通過容認の伝令が届いているようで、待ち受けていたように警備の男達が師団の通過を見守っていた。国境から暫くの間ニムル国立公園の中を走った。国立公園とは謂っても先進国のようにきちんと整備されているわけではない。むしろ自然の景観が堪能できた。1時間ほど走ると南スーダンの首都ジュバに出

た。これまでの道中で経過してきたいくつかの集落の中でも一際大きな街だ。この辺りから武力衝突の起きている区域になるのだろうか和祐子は思った。あちこちの建物の壁が崩れている。コンクリートが吹き飛んで鉄筋が剥き出しになっている建物もある。至る所弾痕だらけで、そこが危険地帯であることが一目で分かる。街のあちこちに立っている看板にアラビア文字の表記が目につくようになってきた。イスラムの影響が及んできていることを強く感じる。それらの看板も無傷で立っているものは殆ど無かった。休戦協定期間であったためか、南スーダンの政府軍、反政府軍などは影を潜めているようだった。そこから北に向けて師団は突き進んだ。2日目は砂漠の中に野営した。2人の女性は昨日と同じように寄り添って寝た。夜半獣の遠吠えがする。その声が聞こえるたびに亜希子は祐子の懐に顔を埋めた。暫くすると亜希子がトイレに行きたいと言った。怖いので一緒に行って欲しいと祐子に頼んだ。祐子は頷いて脇に置いてある小銃を手にした。ふたりは静かに外に出た。ジミーが軽く頷いてふたりを送り出した。空一面の星がふたりを取り囲んだ。

「まあ、お姉様、星がきれい」

「声が大きいわ・・・本当に、美しいわね」

祐子は声を抑えて言った。ふたりがテントの裏手に出ると、突然トイレ用テントの背後から2つの黒い影が顕れ、いきなり亜希子を抱きかかえようとした。男達は覆面をしている。祐子は小銃を構え空に向けて空砲を放った。すぐにジミーが駆け付けて来た。大勢の兵士も集まって来て一時騒然となった。2人の男は駆け付けた兵士達に取り押さえられた。2人は覆面を剥がされた。若い兵士だった。隊長が姿を現した。集まった兵士が事態を説明している。隊長は若い兵士のところに来て、

「Kijinga!」(ばか)

と言うなり2人の頬を思い切り平手打ちした。2人はその場に倒れた。

「Tafadhali nisamehe.」(ゆるしてください)

2人はその場にひれ伏した。祐子が言った。

「Nahodha, tafadhali kuruhusu watu wawili.」(隊長、2人をゆるしてあげて)

「Sawa, Mama Yuko.」(ママ・ユウコ、分かりました)

隊長は2人に一言二言注意をして解放した。兵士達もテントに戻った。

ジミーはふたりから少し離れたところで小銃を構えて立っている。

亜希子が小さな声で言った。

「由宇お姉様、ごめんなさい」

「亜紀、我慢できた？さあ、早く用足ししなさい。ここで待っていてあげるから」

テントに戻ると、亜希子は祐子に寄り添って、祐子の胸に頭を埋めた。

「由宇お姉様大好き」

「さあ、寝ましょう」

祐子は亜希子の頭を自分の胸に抱きかかえた。

次の日も、その次の日も野営したが、亜希子はもう何も心配にならなかつた。しかし、南スーダンからスーダンに入る国境はスムーズに通過することが出来なかつた。南スーダン側の検問所で小銃を手にした私服の係官5人が装甲車の荷物の検査をすと言ひ張った。ルワンダ軍の指揮官が南スーダン政府から事前に入手してある通過許可証を示しても5人は引き下がらなかつた。師団はそこで立ち往生してしまつた。祐子と亜希子はジープから出ずにことの成り行きを見守っていた。その時検問所の裏手からカーキ色のサファリウェアを着た身体の大きなふたりの男が銃を手に5人に近づいて来た。ふたりの男達が5人の内のリーダー格の男に20cm角ほどの紙箱を渡しながらか話しかけた。リーダー格の男はにやりと笑い、4人に目配せした。5人は銃を持ち上げると、銃口をスーダンの検問所方向に向け、ルワンダ軍の指揮官に向かって通過の許可を示唆するようなポーズを取つた。漸く南スーダンから出ることが出来た。スーダンへの入国はスムーズだつた。検問所での審査はなかつた。出発から6日後にルワンダの軍隊はハルツームに着いた。JJWAの一個小隊がルワンダ軍を出迎えた。JJWAはハルツーム市内にルワンダ兵士達の為の宿泊所を用意していた。それは政府軍兵士の官舎のようで、まだ生活の痕跡が感じられ、臨時に解放した場所だということが直ぐに分かつた。隊長はこれまでそこに居た兵士達はどうしたのかと思つたが、

そのことは口にしなかった。祐子はすぐに食料援助の話をしたいと申し出た。J J W Aの部隊長ムハンマド・アブドビニは名だたるフルマの代表が若い女性であることに驚きの色を隠せなかった。すぐに祐子に対して、食糧不足の惨状を視察して欲しいと申し出た。祐子はそれが目的でこちらに来たと言った。祐子と亜希子は翌日からルワンダ軍と離れて、J J W Aの引率で周辺の小部落を視察することになった。ルワンダ軍はスーダン政府がどのような立場で内紛を押さえようとしているかということに拘わらず、スーダンの住民に被害が及ぶと判断した場合は、全面的に住民の救済のために働く用意があると宣言した。これに対して、スーダン政府の担当者はコメントしなかった。ルワンダ軍はあくまでスーダン政府軍による反動分子の殺戮から国民を守る為の活動を支援するために来たのであって、どんな戦闘においても民兵組織であるJ J W Aに一方的に加担することは無いというスタンスを取っていた。J J W Aはそれを不満に感じていたようだが、チャドばかりでなく、ルワンダも敵に廻すことだけは避けたいようだった。祐子は初めはJ J W Aの案内で視察を行うが、その視察を終えたら、暫くスーダンに残留して、別の角度から住民の生活状況などを観察し、支援の妥当性を判断することになっていた。しかし、そのことはJ J W Aの部隊長には話さなかった。ハルツームまでの行軍の途中、祐子はスーダン国内では戦闘の惨状を目にすることはなかった。どこでそんな内紛が起きているのだろうと思うほどだった。祐子はそのこと自体に不可思議な感覚を覚えていた。

亜希子はジープが南スーダンに入国した頃から、意識に悲しみを伴った激しい嵐のような擾乱を感じ始めていた。それは亜希子の意識の奥底に共振を起こさせるものだった。亜希子はそれがこの地で亡くなった人たちの苦しみの叫びであり、悲しみの嗚咽であると思った。しかし、安易に幽界に足を踏み入れてはならないと思っていた。それには先ず、心身の安定が先決であることをいやと言うほど体験していた。亜希子はまだその時期でないと考えていた。

スーダンに着いた翌日、祐子と亜希子は2人の護衛に守られて、J J W Aの部隊長を補佐するネルビという名の若い男性に附いて、ハルツーム

から50キロメートルほど西に入った砂漠の中にある村ラグマに向かった。ネルビの車を追尾してラグマの村に入ると、祐子と亜希子にはその村が生気を欠いていることがすぐに感じられた。

「お姉様、この村の人々の意識は定まっていないようですわ。意識が時々幽界に入っている様子が分かります」

「亜紀、私にもその感覚が捉えられるわ。ネルビさんに案内してもらいましょう」

ネルビはパンの入った大きな袋とペットボトルの入った袋を持参して来ていた。車を降りると、祐子達がジープから降りて来るのを待って、ネルビが一軒の小さな丸い形をした土壁の建物に入って行った。祐子と亜希子は建物の中に入らずに外で待っていた。少しして、ネルビが入り口から顔を出し、祐子達に中に入るように手招きした。先ず祐子が中に入ろうとすると、ジミーがそれを遮って先ず自分が入ると言った。祐子はジミーにここで待つように言った。ジミーは引かなかったが、祐子の言葉に一步後ずさりし、中を覗き込むようにして入り口に立った。メドリスナは祐子が中に入った後、続いて入ろうとして亜希子に止められた。メドリスナも諦めて入り口に、外に向かって銃を構えて立った。祐子に続いて亜希子が入った。祐子が部屋の奥に脚を踏み入れた時、薄暗かった部屋の中がパッと明るくなった。それは印象ではなく、太陽の光が差し込んで来たような急激な、それでいてやわらかな変化だった。部屋の中は酸っぱいような腐敗臭がして、亜希子は思わず鼻をつまみたくなかったが、明るさの変化があまりに強烈な印象を与えたため、亜希子はただ茫然としているだけだった。ネルビは驚嘆して危うく持っている袋を落としそうになった。祐子は何も反応を示さない。痩せて頬骨が浮き出た女性が、ぐったりとした1、2歳の女の子を抱いて壁に寄り掛かっている、虚ろな目つきで入って来た祐子と亜希子を見つめた。母親の横に4、5歳の男の子が横たわっていた。顔がこけて目が奥まで落ち込んでいる。手も脚も痩せて枯れかけた百日紅さるすべりのように骨の形が浮き出ている。腹だけが異常に大きく突き出ている。典型的な栄養失調の症状を呈していた。男の子は直接太陽の光を浴びたかのように目をしばだたせて

いる。

「They didn't take any meal for two days.(彼らは2日間食事をしてなかったんです)

「Help us. Help my daughter.」(私たちを助けてください。この娘を助けてください)

祐子は近づいて、横たわっている男の子を抱き起こし、自分の胸に抱き締めた。祐子は暫くの間男の子を抱き締めたまま、目を閉じていた。

「Don't mind. You are OK now.」(心配ないわ。もう大丈夫)

男の子は祐子の腕の中で言った。

「Mom, Mom」(ママ、ママ)

祐子が男の子を離すと、男の子の腹はみるみる小さくなり、腕と脚が普通の子供のような太さに戻ってきた。祐子は母親に歩み寄ると、母親の腕の中にいる娘の頭を撫でた。ずっと身体を洗っていないようで、腐敗臭はその娘から出ているようだった。祐子が頬に手を触れると、嬰兒はうつろな瞳を開いた。祐子はその赤ん坊を母親の手から静かに受け取ると、自分のサファリシャツの前のボタンを外し乳房を出した。娘は目が見えないようだった。乳房を赤ん坊の口元に近づけると、口で祐子の乳首を探しているようだった。祐子は自分の乳首を娘の口に含ませた。初めは吸う力もなかったが、娘はやがて少しずつ乳を吸い始めた。2、3度むせたが、次第に力強く吸うようになってきた。祐子は自分の乳を通して、エネルギーが嬰兒に注がれてゆくのを見つめていた。乳を与えるときの快感は、祐子に命が沸き立つ喜びを覚えさせた。スバハに乳を与えるときの感覚が蘇ってきて祐子は感動にうち震えた。亜希子もネルビもまんじりともせずその光景に見入っていた。祐子の目から涙がこぼれ、赤ん坊の目の上に落ちた。あたかも祐子が自分の涙を嬰兒の目に注いでいる様に亜希子の目には映った。娘は祐子の目を見つめて、にっこり笑った。ぼっこり膨れていた娘の腹がみるみる小さくなっていった。暫く祐子の乳を吸っていた赤ん坊は、やがて乳首を離すと、「ブ、ブ、ブ」と言った。母親が祐子から娘を抱き取り、目に一杯涙を溜めて、娘を抱きしめた。

「Huruma will help your family. Never mind to have food any more.」（フルマはあなた方家族を助けます。もう食料の心配はしないでください）
亜希子がネルビからその家の住所と家族の名前を聞いて震える手でメモに書き取った。ネルビが袋からパンを2つ取り出して母親に渡した。母親は娘を小脇に抱え、片手を地に着いて頭を地に押し当て、感謝の祈りを捧げた。ムスリムだった。

「This is one of many poor families in this village.」（ここはこの村にある沢山の貧しい家族の内のひとつです）

「I know it.」（わかっているわ）

奇蹟的な光景を目の当たりにしたネルビは全身の震えが止まらなかった。知らずに目から涙が溢れ出てきた。ネルビはそれを隠そうともしなかった。

「I saw miracles. You must be an Allah' s messenger. I shall obey your word.」（奇蹟を見ました。貴方はアッラーフの使者に違いありません。私は貴女の言葉に従います）

「I am that I am. I am just the representative of Huruma. Allah would say “save poor people” . Please obey Allah.」（私は私です。私はフルマの代表だけです。アッラーフは貧しい人を救いなさいとおっしゃっています。アッラーフに従ってください）

彼らはムスリムだった。祐子は彼らに分裂を引き起こさせるような行為はさせたくなかった。祐子はあくまでフルマの代表の立場を貫いた。

ネルビは涙を流しながら、祐子と亜希子を案内して次の貧民の家を訪れた。そこは老人の家だった。熱帯地方とも思えないほど冷え冷えとした家だった。丸い土壁の部屋の奥に老夫婦が寄り添うようにして壁に寄り掛かっていた。妻の膝の上には草で編んだ筵が被せられている。妻は目を瞑っていた。夫は天井を見つめたまま、まんじりともしない。ふたりの頬はこけ生気を失って久しいことが見て取れた。

「They have nothing. They look like waiting to die. No job, no money, no dream and yet no hope to live.」（彼らには何もないんです。ただ死ぬのを待っているようです。仕事も、お金も、夢も、そして生きる望みさ

えもないのです)

祐子を見つめてネルビが言った。祐子は妻が動かないのが気になった。目を瞑ったまま安らかな顔をしている。祐子は妻の所に行ってそっと手を取ろうとして筵を避けた。妻の手がだらりと下に垂れ下がった。死んでいた。夫も妻が死んだことに気付いていないようだ。祐子の様子を見て亜希子とネルビは妻が事切れていることに気付いた。ネルビは祐子の行動を注視した。天井を凝視していた夫が、漸く妻が死んでしまったことに気付いた。這いずるように妻のほうに寄ると、大きくうなだれた。そして苦しそうに呼吸をした。夫の目に涙が光った。祐子が下に垂れさがった妻の手を取るとまだ温かかった。祐子はしゃがみ込むと妻を抱きしめて自分の身体の胸の中心に位置する壇中からエネルギーが迸り出て妻の身体に注がれてゆくのを直視した。暫く妻を抱きしめていてから、目を開くと祐子は亜希子を見て軽く頷いた。亜希子は祐子の意図が分かった。すぐに瞑目し瞑想状態に入った。妻の意識を追った。まだ幽界にも赴かず自分自身と夫の肉体の周りを徘徊していた。労わりの気持ちが夫に向いていて、自分が動けないことに対する悔しさが死後のプロセスへの移行を妨げていた。亜希子は妻の意識に語り掛けた。

「自分の体に戻ってください。貴女はまだ死んではいけません。ご主人と一緒に楽しい人生を生きてください」

妻は自分が死んでしまったことを初めて知った。

「自分の肉体に戻りたい、戻ろう」と強く意識してください。ご主人が待っています」

妻は頷いた。頭を地に着けるように下げて必死に祈りを捧げ始めた。亜希子の目の前から妻の意識が消えた。亜希子は瞑目を解いた。

祐子は妻が呼吸をし始めたのを知った。妻は生き返った。祐子は妻の全身にエネルギーが充満してきているのを直視した。みるみる顔色が赤みを帯びてきて、遂に妻が眼を開いた。祐子はネルビからペットボトルの水を受け取ると、栓を開けてそれを妻の口に持って行った。妻は初め唇をほんの少し開けて舐めるようにしていたが、やがてひとくち口に含むとそれを呑み込んだ。ゴクンと大きな音が響いた。妻が言った。

「Allah saved me.」(アッラーフがわたしをお救いくださった)

祐子はペットボトルの水を妻から受け取り夫に渡した。夫も音を立てて水を飲んだ。2人はみるみる意識が蘇ってきた。生氣を取り戻した。

「Please hold on living. Huruma will support you and your wife.」(頑張って生きてください。フルマが貴方と奥さまをご支援いたします)

「You must be the Earth Goddess, Ala.」(貴女は大地の女神—アラに違いない)

夫は窪んだ目で祐子を見つめて言った。ネルビが袋からパンを2つ取り出して夫に渡した。2人の口元に頬笑みが浮かんだ。亜希子はネルビに聞いて住所と名前を控えた。ネルビは初めて目にした光景に驚き、うち震えていた。ムハンマドやイエスの行った奇蹟を、目の前にいるふたりの女性が自然な姿で行っている。ネルビの目から涙が止め処なく流れ落ちた。ふたりはネルビに導かれて、特に貧困に喘いでいる5軒の家を巡った。巡回している中で、祐子に触れられただけで傷病が回復した者たちもいた。ネルビはまるで酒に酔ったようにふらふらした状態でふたりを案内していった。村を去るときにはラグマ全体に生氣が蘇っていた。ネルビが言った。

「Mama, please allow me. I have to apologize to you. Visiting Ragma is the demonstration to get Huruma's support. There are many poor villages all around in Sudan. It doesn't matter to JJWA, whether they are poor or not. The supplied food from Huruma shall be controlled by JJWA for the organization of JJWA itself. Few food may be supplied to them. I'm not sure.」(ママ、許してください。私は貴女に謝らなければなりません。ラグマの訪問はフルマの支援を獲得するための演技です。スーダンにはいたるところに貧困な村があります。フルマから供給される食料はJJWAがJJWA組織自体のためにコントロールするでしょう。食料は彼らに殆ど供給されないかもしれません。わかりませんが)

「Huruma will supply food directly to the target villages in Sudan. We will study the logistics to deliver them safely. Therefore, we will stay here for the investigation of poor villages until we recognize the real situation.」

(フルマはスーダンの目的の村に直接食料を供給します。我々は食料を安全に配送する手段を研究します。だから、我々は実態を認識できるまで、貧困な村を調査するために、ここに滞在します)

ネルビは安心した。祐子は自分に対して極秘であるはずの J J W A の意図を明かしてくれたネルビのことが心配になった。

「Mom, Did you make her to bring back to life?」(ママ、あなたが彼女を生き返らせたのですか?)

「No, I didn't. She was still alive at that moment. Miss Aki guided her to be aware of conscious.」(いいえ、あの時、彼女はまだ生きていました。亜紀さんが彼女に意識を気づかせたのです)

「You are both the unbelievable women.」(おふたりは驚くべき女性です)

祐子達を護衛していたジミーとメドリスナは、ラグマでの祐子と亜希子の一連の奇跡的な行いを目の当たりにし、自分たちの責任の重さを改めて痛感したようであった。ふたりは祐子がクツの首長を訪問したとき、祐子を救出するために首長の家に向けて出陣したことがある。そのとき、空中に浮いた祐子の姿を見て、地にひれ伏したことを思い出していた。このふたりのことを真の女神だと信じていた。祐子達が貧困者の家を訪問するたびにふたりは家の中まで同行しようとしたが、祐子がそれを押し留めていた。彼らは家の入り口に立って祐子達を護った。ふたりとも常に無言だった。

ラグマを引き上げる時、祐子がふたりに向かって言った。

「Asante sana.」(どうもありがとう)

亜希子も言った。

「Asante sana.」(どうもありがとうございます)

男達は微笑んだ。それが喜びを伴っていることを、ふたりの女性はすぐに感じ取った。ジープはジミーが運転することになった。祐子と亜希子がジープに乗り込むと、ジミーはネルビの車の後を追尾した。ハルツームまでは1時間以上かかった。既に陽は落ちかけていて、辺りは次第に薄暗い帷に包まれてきた。土塀の家々の脇を通り過ぎる時は、メドリス

ナは一層警戒心を強く働かせていた。無事ハルツームの市街に入ると、見たこともない形の建物がちらほら見える。今朝の兵舎周辺の様子からは想像もできない様な光景だった。灯りに浮き上がっている看板の中には中国語も伺えた。ホテルは一流ホテルとのことだった。一流とは言ってもアフリカでのこと、自ずとその設備などが想像される。ホテルのエントランスに着くと、ネルビは翌朝迎えに来ると言って去って行った。

「由宇お姉様、このような立派なホテルは久しぶりです。何となくワクワクしますわ」

「そうね。私も久しぶりだわ。だけど、ここは JJWA の案内で貧困村を訪問する 2 日間だけよ。JJWA が費用を持つからね」

「その後はどうなるのですか？」

「訪問する村に泊めてもらうわ。実際にその場所に居ないと実体が掴めないから」

「お姉様、分かっています。覚悟は決めています。ところで男性 2 人はどうするのかしら？」

「この人達もこのホテルに宿泊するわ。JJWA にそういう条件を出したのよ。彼ら了解したわ」

車を駐車場に停めると、ジミーとメドリスナは 4 人分の宿泊用の荷物を軽々と持ってエントランスを入った。ふたりの男性の小銃は手持ちのバッグに押し込んである。祐子は先ず自分達がチェックインし、ふたりの男性がチェックインするのを助けた。部屋はダブルベッド・ルームの 2 部屋で、男性達と隣同士にしてもらった。4 階の 4 1 5 号と 4 1 6 号の部屋が割り当てられた。祐子はジミーとメドリスナに部屋の前に立つ警護は他の客に恐怖心を与えるので、緊急時のみの対応をしてほしいと頼んだ。兵士達はなかなか納得しなかったが、外出時には必ず同行することと、30 分ごとに巡回をするということで漸く妥協した。この街には沢山の中国人が住んでいるということを鹿島から聞いていたので、祐子は亜希子に中華料理を食べに出ようと言った。

「由宇お姉様、素敵ですわ。ホテルの外に出るのでしょうか？」

「そうよ。ジミーとメドリスナにも一緒に食事してもらいましょう」

亜希子は早速、隣の部屋に電話を掛けた。ジミーが出た。

「Hello!」(もしもし)

「Jimmy, 10 dakika Baadaye, sisi kwenda nje kwa chakula cha jioni.」(ジミー、10分後に、私たち食事に出るわ)

「Mimi kuelewa. Sisi kufuata sasa.」(わかりました。すぐにご一緒します)

祐子と亜希子がドアを開けると、既に2人が小銃の袋を持って立っていた。祐子が言った。

「Tuende mgahawa Kichina.」(中華料理店に行きましょう)

2人の兵士は黙って頷いた。ジミーの運転だった。

ハルツームの繁華街は思いのほか近代化されていて、亜希子には、こんな都会のすぐ近くで、今日食べるものもなく苦しんでいる人たちがいる事実を、実感として思い描けなかった。祐子は現実の姿を思考の外側に出て見つめていた。中華料理店の建物とその周囲を囲む塀は赤を基調にした装飾が施されていて、一見して派手な印象を受けるレストランだった。特に駐車場などは無く、手前の広い敷地に駐車して、4人は歩いてレストランに向かった。入り口を入ると、案内係がやって来た。ジミーとメドリスナは入口に立ったまま奥に入って行こうとしない。祐子が言った。

「*****」(一緒に食事をしましょう)

ジミーが答えた。

「*****」(我々は護衛です。それはできません)

祐子は優しそうな眼で、2人に言った。

「*****」(食事中が危ないんですよ。だから、食事をいっしょにしてください)

「*****」(申し訳ありませんでした。ご一緒します)

ジミーが答えて、女性たちの後に従った。テーブルに着いて食事をしている客たちが、一見して物々しさを感じさせる4人に視線を投げ掛けてくる。東洋系の客が多いという印象を受ける。案内係に促されて、祐子と亜希子が奥にある円形のテーブルに着いたが、2人の兵士は小銃の袋

を持ったまま、突っ立っていた。

「*****」(貴方達も座ってちょうだい)

祐子の声で2人は、遠慮がちに席に着いた。テーブルは6人掛けで、祐子と亜希子は隣同士、その両脇に1席ずつ空けてジミーとメドリスナが座った。

「亜紀、何が食べたい？」

「わたくし、久しぶりにチャーハンを頂きたいです」

「*****」(ジミー、メドリスナ、あなた方は？何が好き？)

「*****」(ママ、われわれは中国の料理は食べたことがありますから、わかりません)

「*****」(ごめんなさいね。じゃ、私が選ぶわね)

ウエイターがすぐにお茶を4人分持って来た。祐子が卵スープと回鍋肉(ホイコウロウ)、青椒肉絲(チンジャオロウス)、炒飯、春巻をそれぞれ4人前頼んだ。暫くして、ウエイターが次々に料理を持って来た。祐子と亜希子はその量の多さに驚いた。とても4人では食べられそうにないと思った。2人の兵士は緊張して顔が引きつっている。亜希子は席を立つと、2人の兵士の近くに行行って取り皿に料理を一通り取ってあげた。2人は姿勢を正したまま動かない。亜希子が席に戻ると祐子がスワヒリ語で言った。

「*****」(さあ、いただきます。ジミー、メドリスナ、ご苦労様でした。ゆっくり食べてください。それでは始めましょう)

祐子と亜希子が食事を始めると、少しして、2人の兵士も亜希子の取ってくれた料理を食べ始めた。しかし、プラスチックの箸がうまく使えないようで、料理は口元で直ぐに皿に滑り落ちてしまった。祐子はウエイターを呼んで、フォークを持って来てもらった。フォークを手にすると、途端に2人の兵士は勢いよく食べ始めた。初めは警戒しながら食べているようだったが、少し食べると味が気に入ったようで、あっという間に亜希子の盛ってくれた料理を平らげてしまった。

その時、左手の奥の方で「ガチャ」という大きな音がした。2人の兵士がさっと立ち上り、いつの間にか小銃を袋から出し、両足を広げて中腰

になり銃を構えた。それを見た周辺の席の客が一斉にテーブルの下に潜り込んだ。ウェイターが跳んで来て、頭をペコペコ下げながら銃を構えている兵士たちに言った。

「I' m so sorry. The kitchen staff fell dishes onto the floor.」(すみませんでした。厨房で皿を落としてしまいました・・・)